



323
646



始



30. 8. 27

2743



福岡女子專門學校教授
福岡英數學館講師

文學士 荒瀨 邦介 編

5

國語問題集

大阪 日本出版社發行

大正
14. 9. 19
內交

緒言

- 一、本書は高等學校諸專門學校入學者の豫備校たる福岡英數學館の依頼に依つて編纂した。
- 一、本書の材料は、大正元年以降の高等學校及び諸專門學校の試験問題により之を採録した。
- 一、年次によつて課を別ち第一課から第十四課に及んだ。
- 一、編纂の都合上、少數の問題及び重複した問題は成るべく之を割愛したが、基本となるべき熟語は重複を厭はないで之を採録することにした。
- 一、文の右側に○印を附したのは、文法上看過すべからざる重要な語であるから、特に注意して遺漏なからんことを期せしめる爲めである。
- 一、各課の順位文字の下にある數字は、備考欄の一般索引で、文中右側に記した數字は、一般索引中に屬する文の語彙索引である。
- 一、本書欄外の學校名は略語を用ひたが、讀者諸子にはおわかりであらうと思はれる。

②

一百十五頁計
九十九頁

15 | 137 230
 230 - 97 = 133
 133

230
 230
 230

17
 230 | 137

ので更に説明することを省略した。
一、本書は、獨り受験者諸子の参考書たるのみならず、中等學校の國語補助讀本として、若くは夏期休業中に於ける補修資料として適切であらうと信ずる。

著者しるす

次 目

第一課	一	備考(解答)	一三二
第二課	一四		一三五
第三課	二七		一三九
第四課	三九		一四一
第五課	五二		一四四
第六課	六七		一四七
第七課	八三		一五一
第八課	一〇一		一五七
第九課	一一八		一六一
第十課	一三七		一六六
第十一課	一五三		一六九
第十二課	一七〇		一七四
第十三課	一八六		一七八
第十四課	二〇四		二八二
解釋上注意すべき一般事項			二三一

(問題)

備考(解答)



參學生 國語問題集

文學士 荒瀬邦介著

第一課

(1)

平易ナル口語文ニテ解釋セヨ

「大正元
各高等」
十訓抄
詳(作者不

人は慮なくいふまじきことを口どくいひ出し人の短きをこしりしたることを難じか
くすことを顯し恥がましきことをただす。これらはあるまじきわざなり。われは何と
なくいひちらして思ひもいれぬほどにいはるる人はおもひつめていきどほり深くなり
ぬればはからざるに恥をも與へられ身のはつるほどの大事にも及ぶなり。

二(2)

解釋

「大正元
各高等」

無しと聞けば有りといはまほしくあしきといふをばよきと事かへていはんはいとね

花月草紙
信(松平定)

ちけたる事なり櫻てふ花はわが國のものなるを漢土にもありとて様々ためしなどひきつくれど櫻かきたる漢土の畫もなくかなへりと思ふ詩もなければ無しとこそいふべけれ。

三(3)

解釋

「大正元
東京高
師」

一 書見る目はただ明かならんことこそあらまほしけれ。一字の上にても徒に看過さずその文に惑はすうはべになつます其の時其の時の有る形を考へ合せて底の心をあらはし事の實を得んことは目明かならずしていかでかは見るべきかく明かにせば明かならん眼なるを其の見ることに紙の上に限りにて其の餘を見るに及ばずあたら年月を文机のもとに過しものら廣く見知りたりとも何の益かはあるさる人は見すともあれかし。

解釋

「同上」

二 希代の朝恩、不覺の名、右近の橘、

主觀

果報

「同上」

三 國の造、水の嵩、檜皮茸、

蒐む

辱す

物事を如き一たり
思惟したる白

四(4)

解釋

「大正元
廣島高
師」

一 おのが顔は鏡に寫して見ることを得べし。されど吾人の「自己」は、其の思ふ思を意識の鏡に寫し出づるに止りて、思を思ふみづからの真姿そのものは、長へに之を隠して現さず。吾人の見る所は唯様々の思の絲彩の意識の鏡に織り出さるる現象的自己のみ。その之を織り出づる主の「自己」當體は、竟に永劫無色不可見の手たるなり。

「同上」

二 沙汰の限、

東の間、

桑門、

東帯

障目

おからさまに、

うたかた

情趣ニツキテノ所見ヲ述ベヨ

三 宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下臥

聲かれて猿の齒白し蜂の月

「同上」
太田垣蓮
月の歌
榎本其角

「大正元
東京女高
師」

五(5)

傍線ヲ施シタル辭句ヲ拔出シテ讀方並ニ略解ヲ記シ然ル後ニ全文ノ大意ヲ解釋スベシ

戰國以來學問文藝の道衰へて、典籍の散逸せる事驚くに堪へたり。應仁の亂に博識の名ありし一條兼良公の邸内の文庫は、辛うじて兵燹の禍を免れしかど、七百餘合の長櫃に滿ちたりし藏書は、猛夫の狼藉にあひて、路上に蹂躪せられたりとぞ。其の後、兵亂織豊二代を通じて荒び、國狀の悲惨この時に過ぎたるはあらざりき。家康公霸權を握りて、干戊ここに收り文教大に興りにき。公は焦眉の急務として、銳意遺書の蒐集に努め、上は内裏仙洞より下は市井の民家に至るまで、搜索探求及ばざる所なく、當時褊狹なりし公卿が、家寶として篋底に秘め置ける書類まで、嚴令の下に呈出せしめぬ。而して是等は五山の僧侶をして、或は筆寫し或は上版せしめたりき。

六(6)

傍線ヲ附シタル箇所ヲ解釋セヨ

「大正元
東京高

ある盗人使應にとられて拷問せられけるに、強竊たびかさなれるものなりければ斬ら

「大正元
寄居歌談
樹」
(近藤芳)

るべきに定まりにけり。其の折かうべをもたげて今はあぢきなき身となりて侍れば、露ばかり思ひ残す事も侍らず。只年頃たしなみし道に侍れば、辭世の和歌一首つかうまつるべしといふみな人あざみてやさしき志なりはやつかうまつれといひければ、ぬす人かかる時こそ命のをしからめかねてなき身と思ひしらすばど高らかに二かへりながめぬこはいかに太田道灌の歌ならずやとがめければ、すこしかたゑみてこれなん今生のぬすみをはりに侍るといへり。

七(7)

解釋

「大正元
長崎高
商」

(イ) 世の人に名をだに知られずさもありがちなきものの中に思の外に砂中の玉泥の中の蓮など云はむさまの人はあるべし。
(ロ) 舊臘來内証の噂高かりし彼の會社にては依然として姑息なる手段を弄し今日に至るまで未だ一人の役員を黜陟したるを聞かず。
(ハ) 彼等をば既に自家藥籠中のものとはなしたれども窮鼠猫を齧む譬もあれば尙此の上の用心こそ望まほしけれ。

八(8)

「大正元
山口高
商」
徳富蘇峯
「知己難
ノ一節」

「同上」
西行法師
村田春海

一 楊巨源の詩に曰く詩家清景在新春柳嫩鶯黄色未色勻若待上林花似錦出門皆是看花
人と龍を見て龍となす難きにあらす一寸の蛇を見てはやくもその雲を起し霧を吐き
茫洋として玄間を窮め日月に薄るを知るこれ難きなり知己の難きはそのいまだ發達
せざる時において他日の發達を卜することの難きにありその見れたる嬉笑怒罵の外
に隠れたる胸間の神秘を會得することの難きにあり。
二 吉野山こそこのしをりのみちかへてまだ見ぬかたの花をたづねむ
心あてに見し白雲はふもとにておもはぬ空にはるる富士の嶺。

九(9)

漢字交リ普通文ニ書キ改メ傍線ヲ附シタル字句ヲ解釋セヨ

「大正元
小樽高
商」

一 入相の鐘のおどほのかにきこえたる夕暮の空のけしきもところのさまもいひ知ら
ず心細げなるをすだれまきあげてつくづくとながめたまひつつおこなひすましたま
へるけはひいみじうあはれなりあかつき近くなりぬらんとおぼゆるまであかした

まひてあまりくるしければやがてはしつ方にうちまどろみたまふ。

「同上」

二 蒲柳の質、
一にして足らず、
覆載の間、
曠日彌久、
宋浮世のさが、

「大正元
熊本高
工」

「同上」
方丈記
(鴨長明)

一 おし曳の大和だましひあらんものは朝となく夕となく津の國のなにはおもはず世
のため國のためよしあしをさたずる道に心をも用ゐる身をもつとむべくなん。
二 行く川の流はたえずしてしかも本の水にあらずよとみにうかぶうたかたはかつ消
えかつ結びて久しく止ることなし。

一一(11)

解 釋

曉がた隣の家々目さましてなりはひの事どもなるべしあやしう聞き知らぬ事どもを

「大正元
米澤高
三羊」
大東六代
本標

おのがじし聲高にいひかはしたるげに海士のさへづりめづらしうもをかしうも。

趣味ある 一二(12)

一 (4) つらつら天地の自らなる景色を見よ。山あり川あり、雨露風雪のけはひいづれか哀とは見ぬ。清風明月一錢の買ふことを用ひずとさる詩仙も歌ひき。求むればとこしなへに失ふことなし。すべていへば一年にして分てば四つなり、四つが一つに千年の風趣を顯して、近く見れば一日の朝夕にあり。

同 上 盤根錯節、切磋琢磨、蕭條、齟齬、落魄、鹵簿、供養、陽炎。

一三(13)

むかし、あべのながまるといひける人は、もろこしにわたりにかへりけるときに、舟にのるべき所にて、かの國人うまのはなむけし、わかれをしみて、かしこのからうたづくりなどしける。あかすやありけん、二十日の夜の月いづるまでぞありける

その月は、海よりぞいでける。それを見てなかつるのぬし、わがくにはかかる歌をなん、神代よりかみもよみたび、いまはかみなかしもの人も、かやうにわかれをしみ、よろこびもあり、かなしみもある時にはよむとて、よめりけるうた、
青海原ふりさけみれば春日なる
みかさの山にいでし月かも

とぞよめりける。かの國人ききしるまじうおぼえたれど、ことの心をとこもじにさまをかきいだして、ここのことばつたへたる人に、いひしらせければ、こころをやききえたりけん、いとおもひのほかになんめできる。もろこし、この國は、ことば異なれど、月のかけは同じことなれば、人の心もおなじことにやあらん。

かたしなやあはれもの
かたしなやあはれもの
かたしなやあはれもの
一四(14)

一 李白は、今人は古時の月を見ずといへれど、むかし世々の人のながめこしもこの月なれば、古人のかたみとなれるも、むかしおぼえてしのばし。古今の人のよをさりゆくは、流水の行きてかへらざるが如し。只月の光のみ、いにしへ今かはる事なき

こそ、こよなうめでたくたふとぶべけれ。

同上

「同上」

二 日ながくしてせうねんのごとく心しづかにゆたけし。

字音ヲ附シ意義ヲ解釋スベシ

三 綱維、⁴ 拋擲、⁵ 顛末、⁶ 蒐集、⁷ 棄却、⁸ 偏頗、⁹ 曝露、¹⁰ 認諾、¹¹ 轟然、¹² 蠢動、¹³

一五(15)

口語ニテ解釋シ尙施線ノ語句ニ讀方ヲ附ケテ詳解セヨ

「大正元
陸士」

一 先づ軍勢催促ありて、首途する時は、生きて再び還らぬ別なれば、老いたる父母、たよりなき妻子の歎、想ひやるも堪へ難かるべし。胸の中いかばかりなるべきか。一步を踏み出しては、今を限の名残と思へど、心強く後を顧みもせず。さて押し行く道に險難切所とも言はず、又今や敵寄せ來るか、此處の森、彼處の山蔭、敵の伏勢やあると、安き心なし。

「同上」

二 成就、名聞、男女、萬歲

右傍ニ漢音左傍ニ吳音ヲ附ケヨ

漢字ニハ讀方ノ假名ヲ附ケ文意ハ文語ニテ解釋セヨ

(イ)之ヲ死地ニ陷レテ而シテ後ニ生ジ之ヲ亡地ニ置キテ而シテ後ニ存ス。

(ロ)君子ハ其ノ位ニ素シテ行フ。

(ハ)猿ニ烏帽子。

本候ニシテ附ハ

一六(16)

解釋

「大正元
海兵」

一 皇祖天照大神手づから三種の寶器を持ち、三句の要道を傳へ、日月と俱に懸り、天地と與に朽ちざる者なり。瓊玉を傳ふるは、其の身を修め克く妙ならしめんと欲するなり。寶鏡を傳ふるは、其の心を正し克く明かならしめんと欲するなり。神劍を傳ふるは、其の知を致し克く斷たしめんと欲するなり。身を修むること瓊の如くんば傷害の厄なし。心を正しくすること鏡の如くんば、毫釐の邪なし。知を致すの道他なし。向ふ所必ず仁に於てし、無慾己を捨て、怠らず荒まず、民の爲に功あるものは、無私を以て即ち賞し、國の爲に害あるものは、無私を以て即ち罰し、造次顛沛も喜怒の情を主とせず、仁にして道に中る。之を以て得たりとなすなり。

「同上」

讀方解釋

二 當意即妙、鼓腹擊壤之民、懸羊頭賣狗肉、斡旋ノ勞、背水ノ陣。

一七(17)

本易ナル口語ニ改メ別ニ傍線ヲ附セル箇所ヲ解釋セヨ

一 つら／＼國運推移の迹を察するに、常に二様の趣向の相纏れて進むを見る。尙文の風と武斷の氣と、一方は華奢、一方は質素、彼は變化を好み、此は秩序を貴ぶ。これらの趣向の古今に亘りて起伏するさまは、恰も紅白二條の綱を一筋に繕りたるが如し。

「同上」

二 さても保元の亂は、前古未曾有の大變にして、天慶以後兵革動くこと屢々なれど、鼙鼓の下に於いて、骨肉相鬪ぎ、道義地を拂ひしこと、之に過ぎたるはなかるべし。これより源平迭に時を得て、皇室陵夷の端全くここに開けぬ。

「同上」

三 漁夫の利、王佐の才、清談の徒、曠日彌久、好下物、肯窮、噴飯、皮相、噬臍、鷹揚。

「同上」

四 貧乏ひまなし。口うれしさうな顔をして居る。いしり込みして進み得ない。

(二) 駄法螺を吹く。(宋)眞つ暗で一寸先きが分らぬ。

一八(18)

解釋漢字ニハ振假名ヲ附スベシ公

一 故右府公(岩倉右大臣)は、摺紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるは、是ぞ明治の朝廷に人ありとは申すべき。此の一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來の千有餘年間の盤根錯節は、總べて破竹の勢を以て破れたり。

「同上」

二 君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、父の恩忽ちに忘れんとす。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には不忠の逆臣となりぬべし。進退維れ谷れり。是非いかにも辨へがたし。

直盛
(手書き)

「大正元
專門檢
定」
橋陰存稿
(井上毅)

第二課

一(19)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正二
各高等」
玉勝間
長(本居宣)

一 常に書きかはす消息文なども文字讀みがたくては言ひやるすぢ行きとほらず讀む人はた苦みて頭かたぶけつつあまたたび讀めどもつひに讀みえずなどしてここ讀みがたしとかへし問はんもさすがになめきやうなればただおしはかりに心えては事たがひもするぞかし。

同上

「同上」
増鏡
(不詳)

二 大塔宮は熊野におはしましけるがしのびくに吉野にも高野にもおはしまし通ひつつさりぬべぎくまぐにはよく紛れものし給ひて猛き御有様のみあらはし給へばいとかしこき大將軍にいますべしとて附き隨ひきこゆるものいと多くなり行きけり。

二(20)

「大正二

解釋

「各醫專」
玉勝間
長(本居宣)

物學ぶともがら物しり人にあひて物問ふにともすればまづ古書の中にもよに難き事として説きえぬふしをえり出でて問ふならひあるはいとあぢきなきわざなりよく聞えたりと思ひて心も留めぬ事に思の外なるひが心得の多かるものなればまづたやすき事をいく度も考へ問ひも明らめてよく得たらん後にこそ難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

三(21)

一線ノ所ヲノミ解釋セヨ

「大正二
東京高
師」
駿臺雜誌
(宝鳩集)

一 渡部競は源三位入道頼政が所従の士には第一のものなり然るに治承年中頼政高倉の宮をすすめて兵を起しし時京師を急に發して倉皇として三井寺に赴きしが打ち忘れてやありけん競にかくとも知らせざりし程に競しばらく猶豫して家にありしを宗盛聞きて日頃競が魁偉なるを見て己が所従にせまほしくおもひしが頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしにこのたび競獨り都に残れりと聞きて六波羅に參れと人をしていはせければ參りけり宗盛對面して汝今より我につかへば入道の恩にまさるべしとて小槽毛といふ馬に貝鞍おき乗換の料とて遠山といふ馬を引きそへ黒絲絨の

「同上」
古今和歌集
秋の歌

よろひ宵まで皆具してたまひけり競かしこまり賜りて悦びて罷り歸りぬ。

解 釋

二 秋さぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。

四(22)

結構ヲ説明セヨ

「大正二
廣島高
師」
徒然草
(兼好法
師)

一 萬の事はたのむべからず。愚なる人はふかくものを頼むゆゑに恨み怒ることあり。勢ありとてたのむべからず、こはきものまづ減ぶ。財多しと頼むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとてたのむべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず、誅をうくることすみやかに。奴したがへりとして頼むべからず、そむき走ることあり。人の志をもたのむべからず、必ず變ず。約をもたのむべからず、信あること少し。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび非なる時は怨みす。

解 釋

「同上」

二 (1)あさ日かげ匂へる山のさくら花つれなくきえぬ雪かどぞ見る。

新古今和歌集
春の歌

- (2) 蕭條として石に日の入る枯野かな。
- (3) いつしか。
- (4) 野分。
- (5) 壁代。
- (6) もよほす。
- (7) さうなし。
- (8) 直衣。

五(23)

文中傍線ヲ施シタル辭句ヲ拔出シテ讀方並ニ略解ヲ記シ然ル後ニ全文ノ大意ヲ通解スベシ

「大正二
東京女高
師」

水戸の常磐公園は……丘陵に立つ時は、仙波沼を隔てて、遠郊一帯の風光雙眸の中に在り。園は徳川齊昭卿の創設せし處、名づけて偕樂園といふ。蓋し民と偕に楽しむの義に取れり。されば常に士民の來り遊ぶにまかせ、花蔭に破子を披いて、一日の歡娛を竭さしめ、月夜にささえを傾けて、一夕の清遊を縦にせしめきといふ。公園には今も猶素焼の人形を鬻げり。其は老農が積葉の側に跪坐して、笠を手にするに象れり。製法粗なりと雖も、亦頗る雅致に富めり。世人之を呼んで農人形と稱す。卿は常に深く意を農事に留め、屢々園中の小亭に臨みて、親しく稼穡の勞苦を察しき。嘗て銅を以て老農の形を鑄しめ、居常之を座右に置き、食膳にむかふ毎に、必ずまづ、初穂として一箸の飯粒をこれに供へ、然る後食するを例とせり。今鬻ぐ所は、之を模造したるものなり。……卿の曩祖光圀卿、亦嘗て菟裘の地を太田郷西山

に擇び住み、暇ある毎に農夫を此處に引見せしが、其の室は廣さ十數人を容るるに過ぎず。殊に書院との間の鬨を撤したるは、わざと貴賤の別を離れて、親しく農事を談せんとする意に出でたりといふ。

六(24)

三四行ノ短文ニ約メヨ

語の創新なるをめづるは、人情の自然なれども、語は新しきをのみ取るべきにあらず。古くよりいひふるしたる語の、今尙棄てがたきままあり。かかる語は分外に幽女の旨を含めることあり、更に敷衍せらるべきことあり、新しき解釋を容るることあり。語の創新ならざるを惡むは、自然の風物の萬古一色なるを惡まむが如し。いかなる新釋を容るとも餘あらむ語は實に不易の妙語なり。その幽玄なるは自然その物にも比すべし。而してたぐひはひとり賢者詩人の語において見るのみにあらず。俚歌及び俗言のうちにもしばしばあり。

七(25)

解釋

「大正二
長崎高
商」

一 人間の情誼は僻陬の地にても大なるけぢめなきものなり知らぬ國を旅行する人は到る處の津々浦々にて渡る世間に鬼はなしの俚言をまのあたり經驗すべし。

「同上」

二 つこもり。はなむけ。くろがねのとびら。あつがましきねがひ。おひめをはたる。

「同上」

三 日和、路普請、月旦、荏苒、杞憂、自家挿着。

八(26)

解釋

「大正二
山口高
商」
徒然草

一 花はさかりに月は隈なきをのみ見るものは雨にむかひて月を戀ひ垂れ籠めて春のゆくへ知らぬもなほあはれになさけ深し咲きぬべきほどの梢散り萎れたる庭などこそ見所多けれ。

同上

「同上」
十六夜日

二 ころはみ冬たつはじめのさだめなき空なればふりみふらすみ時雨も絶えず嵐にき

此の春はみれば冬は積りてとあるは三月あるから三月とあるとの意あり

〔阿佛尼〕

ほふ木の葉さへ涙と共にみだれちりつ。事にふれて心ぼそく悲しけれどどどまるべ。きにもあらでなにとなくいそぎ立ちぬ。

九(27)

句讀ヲ施シ漢字ニハ總ベテ假名ヲ附シ傍線ヲ附シタル箇所ハ意義ヲ解釋スベシ

〇 虚文空論儀容を飾り邊幅を修め識見氣幹の世を蓋ふに足るものなきは固より吾輩の取る所に非ず大言壯語徒に一時の快を取り沈着寧靜の氣象なきもの亦吾輩の取る所に非ず吾輩の今日に望む所のものは他なし特殊の本領あり識見高く才覺敏き先覺先進の士起らて以て士氣の挽回を謀り虚文虚禮に拘泥せる紳士と危言壯語に滔滔たる壯士との假面を排斥し去らんこと是なり。

一〇(28)

解釋

この源三位入道頼政は保元の合戦の時も味方にて先をかけたたりしかどもさせる賞にも預らず又平治の逆亂にも既に親類を捨てて参じたりしかども恩賞疎なりき大内守護にて年久しくありしかども昇殿をば許されず年たけ齡傾きて後述懐の和歌一首

〔大正二
米澤高
工〕
平家物語
(不詳)

詠みてこそ昇殿をば仕りたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな。

是によりて昇殿を許され正下の四位にて暫くありしが猶三位を心にかけてつ。

登るべき便なき身は木の下にしひをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。

一一(29)

解釋

一 轍の鮒の息つきあへず。見渡す方は目もはるに、入江に續く青海原、波靜にして白鷗眠る。頃は卯月の夏、霞ひき残したる鋸山、かれかとばかり指せば、鑿もて穿ち刀して削れるが如き青壁峙ち、見る目危き長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める漁村の柳、夕を送る遠寺の鐘、いとど哀を催すものから、かくてあるべき身にしあらねば、頻に行手を急ぎぬ。

讀方解釋

二 狂瀾を既倒に廻す。櫛風沐雨、咀嚼、淺茅生。

〔大正二
北海道
大農
里見八
大
琴〕
瀧澤馬

〔同上〕

「大正二
東京帝大
農實」
平家物語
(不詳)

解釋

一一(30)

一一

さる程に、舟出さんとしければ、僧¹都舟にのりてはおりつ、おりてはのりつ、あ
ましごとをぞし給ひける。少將のかたみには、よ³るのふすま、康頼入道がかたみに
は、一部の法華經をぞとどめける。すでに、ともづなどきて、舟おし出せば、僧都
つなに取りつき、こしになり、わきになり、たけの立つまでは引かれて出づ。たけ
も及ばずなりければ、僧都舟に取りつき、「さて、いかにおのおの、俊寛をば遂にす
て果て給ふか、日ごろのなさけも、今は何ならず。ゆるされなければ、都までこそ
かなはずとも、せめては、この舟にのせて、九國の地まで」と、くどかれけれども
都の御使、「いかにかなひ候ふまじ」とて、取りつき給ひつる手を引きのけて、舟
をば終に漕ぎいだす。

一一(31)

II 讀方一ハ解釋……ハ漢字ヲ宛テヨ

「大正二
水産講
習」

一 木曾は名残を惜みつつ、都にて如何ともなるべかりつれども、此まで落來りつるは汝

源平盛衰
記
(不詳)

と一所にて死なんとなり何處までも同じ枕に打死せんと思ふなりと宣へば、今井い
にかくはのたまふぞ君自害し給はば、兼平すなはち討死なり是をこそ一所にて死ぬる
とは申せ兵の剛なると申すは最後の死を申すなりさすが大將軍の宣旨をかうむる程
の人、雜人の中に打伏せられて首をとられん事心うかるべし。

意義一ハ漢字ヲ宛テヨ

二 はるの夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる。

意義ヲ解釋スベシ

三 心にくし、よしなしごと、おもふせ。

一四(32)

施線ノ部ヲ詳解シ且全文ノ大意ヲ文語ニテ概説セヨ、但シ施線中ノ漢字ニハ其ノ右傍ニ讀方(片假名)ヲ
モ附スベシ

一 判官「味方に射つべき仁は誰かある」と問ひ給へば、「手垂ども多く候ふ中に、下野
の國の住人、那須の太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にては候へども、手はきき
て候ふ」と申す。判官「證據があるか。」「さん候ふ。かけ鳥などを争ひて、三つに
二つは必ず射落し候ふ。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ」とて召されけり。

一一

「同上」
古今和歌
集春の歌

「大正二
陸士」
平家物語
(不詳)

施緯ノ部ヲ解釋シ且全文ノ大意ヲ文語ニテ概説セヨ但シ施緯中ノ漢字ニハ其ノ右傍ニ讀方(片假名)ヲモ
附スベシ

「同上」

二(イ)加藤清正の士、あるときの城乗に、金の熨斗附の大小をさして塀をこゆるに、後より尻を押上ぐるものあり。我を押上ぐるものと思ひ、乗上りて後に見れば、熨斗附のさやを切廻して金を取られたり。人みな油断なりと沙汰す。清正が曰はく城乗を心として、後をみざるは勇士なり。但し金の熨斗附を指したるは若輩の故なり。戰場へさやうの美麗なるものをば用ふべからざることを知らずと覺ゆ。末たのもしき若者といはれたり。

同意義ノ他ノ語ニ旨ト換ヘヨ

回波をかづく、をたけびふるふ、みまかる、ほほるむ、おしなべて。

一五(33)

口語文ニ直シノ句ノ解

「大正二海兵」

一(イ)蓋し將は才以て物を將ふるに足るの稱、帥は智以て人を帥ふるの名なり。危急草屯の時、其の用最も將帥にあり。滔々たる武夫も、謀を好み機を挫くの精にあらすんば、未だ其の任に中らず。故に將帥の用たる必ずしも攻戰を以てせず。折衝

敵を屈するの智を要し、誠信撫教の實に本づく。其の任重し。其の選登得易からんや。

讀方解釋

「同上」

二 金甌無缺ノ國體。唇齒輔車ノ關係。嶄然頭角ヲ見ス。誰カ烏ノ雌雄ヲ知ラ
ンヤ。附和雷同。

一六(34)

解 釋

「大正二海軍」

一 上は公卿大夫より、下は布衣褐巾の士に至るまで、苟も學に志せるものは、皆一たび先生の聲咳に接せんことを望みたりき。

同 上

「同上」

二 どの積るに隨ひ、其の聲名ますく高くなりもて行きて、遙に九重の上にも聞え遠く柳營の中にも達しぬ。

同 上

「同上」

三 普天の下王土に非るは莫く、率土の濱王臣に非るは莫し。

「同上」 四、大聲は俚耳に入らず。朋黨比周。口位素餐。大同小異。大車輪の活躍。

一七(35)

解釋

「大正二海經」
「兼好法師」
一 家居のさまにこそ大方人の心もおしはからるれ多くのたくみの心をつくして磨きたて唐のやまどの珍らしくえならぬ調度どもならべ置き前栽の草木まで心のまなからず造りなせるは見る目も苦しくいとわびしきてもやはながらへ住むべきまた時のまの煙となりなんどぞうち見るより思はるる。

「同上」 二 家つと つかの間、冥加、絶對的、相對的。

一八(36)

解釋

「大正二專門檢定」
「徒然草」
一 互に言はむ程の事をば實にと聞くかひあるものから聊か違ふ所も有らむ人こそわれはさや思ふなど争ひにくみさるからさぞとも打ち語らばづれ慰まめと

兼好法師

樗牛全集
平頂盛論
高山林次郎

思へと實には少しかこつ方もわれと等しからざらん人は大方のよしなし事言はむ程こそあらめまめやかかの心の友には遙に隔つる所の有りぬべきぞわびしきや。
洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小云爲の先後、先ずしも辨じ難からず。何ぞ妄に一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。

「同上」 二 蓮府槐門、涅槃、闕伽、杜撰、折衷。

第三課

一 (37)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正三各高等」
「三のしるべ」
「藤井高尙」
一 文はなにのためにかくものぞ人にむかひていふことばはさまやかなるもいひつぐたびにたがひあやまりもし年経てはうせゆくを文の詞は百千の人にうつりてもいささかもたがふふしなく事をさへ心をさへ萬世にもつたふべければそのためにかくも

のになむ。さればいふことのすぢくさだかにわかれて人のよくこころうべきやうにかきえむぞまことの文のさまにはあるべき。

同上

「同上」尾花が本居宣長

輪にせんとて人の吹き出でたる烟のをかしくまどかにていくつもつらなり上るを見て我もなじかはあやまたむいとよくしてむ見給へなどおらかひつつ吹き出したるにあやしうみだれぬるを心うがりてこたびはいかでと口つきいたうつくろひ心したるが又吹きそこなひたるいとむとくなり。

二(38)

解釋

かたちうるはしく物よくいひよききぬ着てまればとに對すがた言葉はすぐれて人のもてなしよくふるまひうるはしく人の目だつべきほどなれど古今の事にうとくかたこといひて人の耳にたてばすがた言葉のうるはしきもむなしくなり人に見おとされあさましく下さまに見ゆるはくちをし。

同上

「同上」徒然草(兼好法師)

今日はその事をなさんと思へどあらぬいそぎ先づ出でてまぎれくらし侍つ人はさほりありて思はぬ人はきたり煩はしかりつる事はことなくて易かるべき事はいと心苦し日々の過ぎゆく様かねて思ひつるには似す一生の間もまたしかなりかねてのあらまし皆違ひのくかと思ふに自ら違はぬ事もあればいよ／＼物は定めがたし。

三(39)

解釋

「大正三」東京高師(玉勝間本居宣長)

近き世學問の道ひらけて大方萬のとりまかなひさどくかしこくなりぬるからとりどりにあらたなる説を出す人多し其の中にもいまだしき學者の心はやりていひ出づることはただ人にまさらんかたんの心にてかろがるしくまへしりへをもよく考へ合さず思ひよれるままにうら出づる故になかなかならいみじきひがごとのみなり。

同上

「同上」増鏡(不詳)

笠置殿には大和河内伊賀伊勢などより兵ども参りつどふ中に事のはじめより頼みおぼしたりし楠木兵衛正成といふものあり心猛くすくよかなるものにて河内の國におのがちのあたりをいかめしくしたためて此のおはします所危からんをりは行幸

をものなしきこえんなど用意したり。

四(40)

本妃は... (Handwritten notes in cursive)

① 解釋

「大正三
廣島高
師」
平家物語
につきて
藤岡作
太郎

一 祇園精舎の鐘の聲、沙羅双樹の花の色、卷を開いてまづ響く琅々の調は流麗にしてまた凄慘なり。二十年の榮華の夢、昨日は樓臺の花の宴に盃を廻らし、今日は海上に楫を枕に月に泣く。有爲轉變の世の習とはいひながら、榮枯盛衰を覆すこと、平家一門の如きは古今の東西に例少く、ありの儘の事實は、詩人の空想を待たずしてさながらの戯曲なり。その局面の波瀾に富めるは、即ち平家物語の七百年後の今日もなほ世人に愛讀せらるる所以にして、一篇の樞軸たる大人物は、いふまでもなく太政入道浄海なり。

同上

二

- (1) われだにもなからん後のふる塚を思へばけふにまして悲しき。(蘆庵)
- (2) 椎の葉にもりこぼすらし春の雪。(几董)
- (3) 四天王金剛杖でいがをむき。(川柳)

- (4) 寺から里へ。(俚諺)
- (5) あさまし。
- (6) ときめく。
- (7) ひがみみ。
- (8) 前栽
- (9) 精進。
- (10) 總角。

五(41)

傍線ノ辭句ヲ拔出シテ讀方ト略解トナ記シ後ニ全文ノ大意ヲ解釋セヨ

「大正三
東京女高
師」

伏見鳥羽に始りて、會津函館に終れる幾多の小争闘は、七百年の武家政治の斷末魔として、尙甚だ簡單なる犠牲に過ぎざりき。是より先、諸國の黒船沿海に出沒して、幕府の有司は之を奈何ともする態はず。尊王論は翕然として天下を風靡し、慶喜將軍は恭順を專として、罪を闕下に乞ふに至れり。これ一に徳川時代に於ける文教振興の結果、忠君の大義を明かにし、國體の根本を理解したる賜にして、明治皇代の降運は、此の勢に乗じて成れるなり。明治中興の業は、直ちに神武創業の世に接せんとせり。是に於て五條の御誓文となり... 皇上の御稜威日に盛にして、新制の舊物を改むること、火の原野を燎くが如し。一切の風俗習慣は變更して、四民平等に文明の徳澤に浴する事となれり。鉛板活字の製造漸く起りて、新聞雜誌の發刊次第に繁く、偏に西洋の文化を吸收するに急にして、當時の流行語は、「文明開化」

の四字のみなりき。

六(42)

傍線ヲ附シタル箇所ヲ解釋スベシ

伊勢の浦にてあまの鮑をとるには乳のみ子など引きつれて夫は權をつかひ居て舟もやひするに妻は海底に飛び入りここかしこ貝を求むるうちに子の乳を尋ねてよよと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ。今ひとつ得まく思へど子の泣く聲の聞ゆるにひかされて浮びいで舟ばりに取りつき息もつきあへず子に乳をそふるその有様哀にして實に惻隱の心も發動すべし。

七(43)

解釋

一 國は豊榮のぼる日の本にして、天照らす日の大神の御裔、長へに此の世を知しめす。神代よりして、我が民族は、三絢の綱うちかけて、國來國來と國引きて、遠く國と交り、青雲のたなびく極み、潮沫のどどまる限り、四方の國平けく治らんことを理想としたり。

「大正三
東京高
商一
雲津雄志
柳澤淇
殿」

「大正三
神戶高
商」

同上

「同上」

二 かの心高き人は、富士の嶺、熊野の海、須磨、明石のおのづからなる景色をめぐれど、心おくれたる人は、かの巧に作りなせらむ前栽のありさま、遣水の心ばへ、岩木のたたずまひなどの、世に似ずをかしきにのみ目くれて、かへりては、そをおのづからなる海山にも優れりとぞ思へる。そはおのがじしの心をひく方なりともいひてやみぬべけれど、萬の道心高き方を求むることまことのすぢなれ。

八(44)

解釋

一 しめやかなる夕暮に宰相の君とよたり物語してゐたるにとののうら殿の三位の君すだれのつま引きあげてゐ給ふ年のほどよりはおとなしく心にくきさまして人は猶こころばへこそかたきものなめれなど世の物がたりしめんとしておはするけはひをさなしと人のあなづりきこゆるこそあしければづかしげに見ゆ。

九(45)

傍線ノ字句ヲ解釋セヨ

「大正三
山口高
商一
葉式部日
記(葉式
部)」

「大正三
米澤高
工藤册子
成上田秋

一 西行法師後に此の時の事を人に語りて云ふ「右大將はまことにねぢけたる君なり
口²に蜜し給へど心には針のおはするぞ漢高の大度曹孟徳の智略あるに似て天下の人
皆此の君の網の中に入れられたるは我が佛の冥福といふ事を生れながら得させけん
只悲しむべきは神の御裔の此の後やうやう衰へさせたまはん世の姿なるは。」

解 釋

「同上」

二 あまのはらふりさけみれば。かすがなるみかさのやまにいでしつきかも。

一〇(46)

解 釋

「大正三
北海道帝
大農」

一 世俗多クハソノ子ノ孝順ヲ願ハズシテ榮達ヲ願ヒ、善ヲ訓ヘズシテ財ヲ遺サンコ
トヲ思フ、心得難シト、哲人ノ鑿⁵感シタルイト理ナリ。誠ニ徳ナクシテ富貴ニ居レ
バ危ク、功ナクシテ祿高キ者ハ久シカラズ。聚メテ散スコトヲ知ラザレバ、其ノ財
却ツテ禍ノ媒トナル。カ、レバ知足ノ二字ハ禍害ヲ攘フ神符ナルベシ。

讀方解釋

「同上」

二 勸懲、完壁、酌量、寂滅、瀆庇、

一一(47)

解 釋

「大正三
東京帝大
農實一
方丈記
(鴨長明)」

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。或は妻子眷屬のた
めに造り、或は親昵朋友のために造る。或は主君師匠及び財寶牛馬のためにさへこ
れを造る。吾今身のために結べり。人のために造らず。ゆゑいかんとなれば、今の
世のならひ、此の身のありさま、ともなふべき人もなく、頼むべきやつこもなし。
たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をかするん。

一二(48)

句讀ヲ切り假名ニ適當ノ漢字ヲ配シ線ヲ施シタル文句ノ意味ヲ書ケ

「大正三
水産講
習」
神皇正統
記(北島
親房)

後白河の御時兵革おこりて姦臣世をみだり天下の民ほとほと塗炭におちにき頼朝一
臂をふるひてその亂をたひらげたり王室はふるきにかへるまでなかりしかど九重の
塵もをさまり萬民のかたもやすまりぬ上下堵をやすくし東より西よりその徳にふく
せしかば實朝なくなりてもそむくものありとはきこえずこれにまさるほどの徳政な
くしていかでたやすく覆さるべきたとひまたうしなはるべくともたみやすかるまじ

くば上天よもくみしたまはじ。

一三(49)

解 釋

「大正三
陸士」

- 一 (イ) 吾人ハ國民トシテ、其ノ三大義務ヲ全ウセザルベカラザルナリ。
- (ロ) 勇壯ノ詩歌ヲ誦スレバ、自ラ金革ヲ衽ニスル心ニナリスベシ。
- (ハ) 朝恩ニ背ク者ハ、近クハ百日、遠クハ三年ヲ過サズトコソ申シ傳ヘ侍レ。
- (ニ) ハダニツケ申候物ニテ御座候ママ守リ袋シンジ參ラセ候。
- (ホ) 能ク我ガ國ノ過去ヲ知ツテ能ク新來ノ長所ヲ探ル覺悟ガアラバ、今ノ時ハ眞ニ多望ノ前途ヲ胚胎シ得ル時代デアル。

解釋シ且施線ノ語ニ讀方ヲ書セヨ

「同上」
保元物語
(不詳)

- 二 爲朝既に誅せらるべかりしが、以前の事は合戦の時節なれば力なし。事既に違期せり。未だ御覽せられぬもの體なり。且は末代にあり難き勇士なり。しばらく命を助けて遠流せらるべし。」と議定ありしかば、流罪に定まりぬ。但し息災にては傍あしかりなむとて、肘を抜きて伊豆の大島へ流されたり。

一四(50)

全文ヲ解釋シ且傍線アル所ハ別ニ讀方ト解釋トヲ記セヨ

「大正三
海兵」

- 一 武士道、この一語を以て、日本國民の大飛躍を闡明する鑰鑰とす。或は米食を以て或は水を飲むこと多きを以て、或は頻繁なる沐浴を以て、優勝の原因なりとするものあれども、これらに穿鑿に過ぎて滑稽に陥るの感なくんばあらず。十目の見るところ、古來の武士道は實にわが國民を不撓不屈の勇士たらしめしなり。昔に矢を立つること勿れの諺も、矢と彈丸との差あるのみ。その諺の生命あるは、今も昔も異ならず。

同 上

- 「同上」
- 二 西洋人は基督教を以て、其の生涯の行爲を律する根本の準繩とす。日本人の中にこれにあたるものを求むれば、儒教にあらず、佛道にあらず、また神道にあらずして武士道なり。武士道はわが國民思想の精髓なり。

讀方解釋

「同上」

- 三 雲烟過眼、¹⁰ 利權ニ均霑ス、¹¹ 尾大不掉、¹² 杓子定規、¹³ 言肺腑ヨリ出ヅ、

「大正三
海機」
徒然草
兼好法
師

一五(51)

一線ヲ附セル語ノ左傍ニ讀方ヲ附シ又……線ヲ附セル辭句ノ解釋ヲ記入セヨ

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細路をふみ分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るる筧の雫ならではつゆ音なふものなし。関伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、哀に見る程に、彼方の庭に大なる柑子の、枝もたわわになりたるが、周邊を厳しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

解釋

一六(52)

「大正三
海軍經
理」
増鏡
(不詳)

東の武士ども雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば笠置にもいみじうおぼし騒ぐもとよりいとけはしき山の深きつづら折を木戸逆もぎなどえも言はずしたためられたればさりとて容易くは破れじと頼ませ給ひながらむねむしき者しなればさすがに物心細くおぼしみたる。

一七(53)

解釋

「大正三
專門檢
定」
土佐日記
(紙貫之)

一家にいたりて門に入るに月あかければいとよくありさま見ゆ聞きしよりもまさりていふがひなくぞこぼれ破れたる家を預けたりつる人の心もあれたるなりけり(中略)いとほつらく見ゆれどこころざしはせんとす。

同上

「同上」

二 成敗と是非とは判然別事に屬す成敗は當時の形勢によりて別れ是非は後人の公説によりて定る若し成者皆是にして敗者必ず非ならば君子不遇の嘆あらずして正人雪冤を後代に望むの概なるべし。

讀方解釋



第四課

「大正四
各高等一
權園文集
足」
中島廣

一 (54)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ

寺々の初夜¹の鐘のひびきもをさまりて皆人も寐ねたるにいとうれしう燈火あかくし
なしてふづくろにうち向ひたるいたう心すみて晝見たりしあたりの心なくて過ぎに
しも思ひ知られて深き心²はへあるくたりくもおのづから解き得らるかしかがけ盡
してもなほねぶたさを知らず油さしそへつつ見もて行くに遠き世の人もたださし
向ひ語らふ心地す。

同上

二 本より御心賢くおはす人は死ぬべききはみにも肝心を迷はさで萬の事を皆ただな
る時の如く行はせ給へば國の政をも息へ民をも治めていみじきさはにもおろかなる
ことなきなり。

二 (55)

口語ニテ解釋セヨ

學問に志ある人は古と今とかはり來し有様をよく知り得んと心がくべきわざなり古

「大正四
廣島高
師遺稿
東園遺稿
藤岡作
太師」

三 (56)

解釋

の事今より見てはいとけしからぬ沿革あるものにて事によりてはゆくへも知らずう
つり來たるものあり然るをただ文章のうはべと今の世のさまを思ひあはせて大方に
のみ心得居るゆるかすめる夜半の月見るやうにておぼしき事のみなり。

一 余輩が歴史上の事實を一の戯曲として最も興味を感ずるは、壯大なる偉人と時代
の思潮とを交渉する際に衝突を生じ破綻を起すところにある。社會より離れて孤立せ
る人物は敢へて與らず、紛々擾々たる群衆の蛙鳴蟬噪も敢へて與らず。

同上

二 十七日の夜は小野の宿といふ所にどどまる。月出でて、山の峰にたちつづきたる
松の木の間けぢめ見えて、いとおもしろし。ここは夜ぶかき霧のまよひにたどりい
でつ。醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやとおもふに、¹⁰から人はなほ立ちよ
りてくむめり。¹¹

いむすぶてににこるころをすすぎなば

「同上」
十六夜口
尼記(阿佛

うんよのゆめやさめがゐのみづ。

「同上」

- 三
- (1) 台覽¹² 同
- (2) 照會¹³
- (3) 受理¹⁴
- (4) 實在¹⁵
- (5) 抽象¹⁶
- (6) 概念¹⁷
- (7) 六親¹⁸
- (8) 右筆¹⁹
- (9) 座元²⁰
- (10) 同僚

四 (57)

傍線アル辭句ヲ拔出シテ讀方略解ナ施シ然ル後ニ全文ノ大意ヲ通釋スベシ

人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一個の成人と爲り、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一方ならず。之を近くして先づ父母の洪恩あり。之に次ぐに師長の恩あり。更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈徳を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、其の福祉を増進し、兇惡を正し不逞を罰し、以て我が父母師長をして、我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして完全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し國家にして其の務を成さずんば、生民亂離塗炭に陥りて、我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なからむ。我等が幸に一個の成人となれるは、實

に是等數者の恩に由る。然らば則ち我等が成人の後に於て、是等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

五 (58)

傍線ヲ附シタル箇所ヲ解釋スベシ

寸陰惜む人なしこれよく知れるか愚かなるか愚かにして忘る人の爲にいはいはば一錢かろしといへどもこれをかさぬれば貧しき人を富める人となすされば商人は一錢を惜む心切なり利那おぼえずといへどもこれを運びてやまざれば命を終ふる期たちまちに至るされば道人はとほく日月を惜むべからずただ今の一念ひなく過ぐる事を惜むべし。

六 (59)

讀方解釋

「大正四
商神」
「戸高

- 一 造詣¹、² 村度、³ 杞憂、⁴ 月旦、⁵ 繁文褥禮、⁶ 聽衆無慮千人。

「同上」
二 昔だに、牛に汗し棟に充つとかいへるを、年に増し世々に添ひし書の數へあへむ

や。よ。し。や。千。年。の。命。保。ち。て。朝。夕。に。文。机。の。下。を。離。れ。ず。と。も。見。盡。す。人。あ。ら。じ。を。
さ。ら。ば。末。々。の。ふ。み。ら。は。其。の。名。を。だ。に。覺。え。置。き。て。事。あ。ら。む。折。に。合。せ。も。す。べ。き。わ。ざ。
な。り。か。し。

七(60)

解釋

近しと聞けばとほし遠しときけば近ししきるもたゆみたゆむも亦しきる雁がねの聲
のきぬたをさそふにやあらんきぬたのねのかりがねに通ふにやあらんあなあやしあ
なあやしそもくこのおとのかなしきか住むさこのさびしきか打つをりのうきゆる
か皆あらず聞く人の心のさびしきなり。

八(61)

解釋

一 凡そ王土に生れて、忠を致し命をすつるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と
思ふべきにあらず。然れども後の人を勵し、その跡をあはれびて賞せらるるは君の
御政なり。下としてきはひあらそひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくし

「大正四
山口高
商一
泊舎集
清水濱
臣」

「大正四
小橋高
商」
神皇正統
記

房(北島親)

て過分の望を致すこと、自らあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは、まこ
どにありがたき習なりけんかし。中古までは、人さのみ豪強なるをば戒められき。
豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふ例あれば、戒めらる
るも理なり。

句讀ヲ施シ傍線アル字句ヲ解釋スベシ

「同上」
平家物語
(不詳)

二 されば聖徳太子の十七ヶ條の御憲法にもみな人心まちくなりおのしふあり
われを是しかれを非すかれをせし我をひす是非のことわりを誰かよく定むべき相共
に賢愚なりはしなくしてたまきのごとし縦令かの人怒るといふともかへりてわがし
つををさめよどこそ見えて候へ君と臣とをならぶるに親疎わくかたなし君につき奉
るは忠臣の法道理と僻事とをくらべんにいかでか道理につかざるべき。

九(62)

解釋

先生徳一世ニ高ク、識古今ニ踰エ、學問該博、議論卓抜、夙ニ國體ノ精華ヲ發揮シ
中外ノ別ヲ明カニシ、名分ヲ正シ、士道ヲ説キ、志經綸ニ存シ才文武ヲ兼ヌ、而シ

「大正四
熊本高
工」

テ不幸世ニ遇ハズ、⁷轉軻困頓、終ニ偉大ノ抱負ヲ實用ニ施ス能ハズシテ逝ケリ、惜ムベキカナ。

一〇(63)

解釋

一 萬よりも手はよくかかまほしきわざなり歌よみ學問などする人はことに手あしくては心おとりのせらるるをそれ何かは苦しからんといふひとわたり理はさることながらなほうちあはぬこころぞするや。

「大正四
北海道帝
大農一
王勝間
本居宜
長」

「同上」

二 同 上
はしなし、⁵
うたてし、⁶
見參、¹³
會釋、¹⁴
まげて、⁹
むげに、¹⁰
をさく、⁸
らうたし、⁷
不覺、¹²
眞加、¹¹

一一(64)

言文一致體ニテ解釋スベシ

春日暖かにして黄鳥鳴き、地方は漸く農桑の季節に向はんとす。農家は方に田に畑を相き、室に煤を拂ひ、男は苗代に従ひ、女は蠶兒の掃立を事とす。平薩州の歌ひ

「大正四
東京帝大
農賞」

たる。

苗代にせきやどむらん垣根なるいささ小川の音よわるなり

といふもの、實に此の時にあらずや。

而して彼等は、星を戴いて出で、月を踏みて歸り、或は膏雨に雙袖を絞り、或は流汗を其の額に揮ひ、水戸武公が詠じたる如く、

あはれなり田面の露のかり庵に濡れつつあかす賤が心は

の辛勞なきにあらざると共に、また夕顔棚の下涼みに、半日の疲勞を洗ふべき清樂あり。而も其の辛勞や、四肢の辛勞にして、其の清樂や、精神の清樂なり。自らこ

一二(65)

句讀、濁點……は讀方、一ハ漢字ニハ説明

一 先ちかき家に行きて主を見るに昔見し人にあらずかへりて何國の人ぞとかむ勝四郎のやまひていふ此の隣なる家の主なりしかわたらひの爲に京に七とせまてありてきその夜かへりまありしに既に荒れすすみて人もすまひはへらす妻なるものもま

「大正四
水産講習
所」
「雨月物
語」
「成」
「上田秋
成」

かりしと見えてつかの設も見えつるかいつの年にもなきにまさりて悲しく待るし
らせたまはは教へたまへかし。

「同上」
二 あやしあやしの鳥獸たにも思を忘れすと承る何なににい況いんんや人倫にんりんの身として。

一三(66)

口語ニテ解釋シ施線ノ所には右傍ニ讀方ヲ附ケヨ

「大正四
陸士」

一 是ハ聞ユル唐皮トイフ鎧よろいゴザンナレ。馬ヲ射テ落チン所ヲ撃テ。向後ハ知ラズ。
過ギコシ方ハツユ違ハズ、アリ難キ相人ナリ。難波ノ蘆ハ伊勢ノ濱荻。人ヲ相手ニ
セズ、天ヲ相手ニセヨ。非常ノ變、不意ノ急ニ差シ懸リ候ハンニモ蘆中拂底あしなニテハ
差支フルモノニ。

讀方解釋

二 御手洗ごてらい

搦手なつて

胡鏡こきやう

好事家こうじか

宣言げんげん

「同上」

三 唯ただ、雷かみなり

侃侃かんかん

權輿けんい

(用例ヲ舉ゲテ其ノ差別ヲ説明セヨ)

侃侃かんかん

權輿けんい

(解釋セヨ)

(ハ) 杜、(コノ字ヲ用ヒテ二字ノ熟語ニツナ作レ)

(ニ) 陸、漢音(リク) 吳音()、(此ノ字ニツキテ漢音吳音ナ()ノ中ニ記人セヨ)

根柢こんてい 畫籠えいろう (此ノ口ノ中ニ右傍ノ假名ニ相當スル漢字ヲ記入セヨ)

一四(67)

誤字ヲ正セ

「大正四
海兵」

一 大悟轍底だいつちてい

癡兵院ちへいゐん

山間僻地さんかんへきち

觀業博覽會くわんごくはくわんかい

功成リ名遂グこうせいりなとぎ

人心脚々にんしんきゃくじゃく

タリ、海上不隱ノ恐アリ、大雨ヲ犯シテ京ニ赴ク。

平易ナル口語文ニ直シ線ノ語句ノ讀方ト意義トヲ記セヨ

「同上」
常陸帶の
序
(藤田東
湖)

二 いつか御褌ごふんどしも過ぎ、秋も半になりぬれば、世を浮雲の絶間なく、またしも霖雨りんうふ
りいだし、板屋の軒端を廻る車の音、荒庭の草葉にすたく蟲の聲、聞くもの見るも
のにつけて、君を慕ふ心いやまさりぬ。

同上

「同上」
梅園叢書
(誠とい
ふ説)

三 常々心にかけて掃灑はきしたらん座席と、俄に蜘蛛のいどり柱ふきたらんとは、いか
で見まがふべき。人生平生をたしなますして、その期に臨み偽り文らんは、誠の俄

貞(三浦安)

掃除なるべし。如見其肺腑とて、人欺く可らず。我が心を欺くなり。

五〇

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心の問はば如何答へむ。

同上

「同上」

四 今此の大事を起すこと、譬へは嬰兒の貝を以て巨海を量り、螭螂が斧を揮ひて龍車に向ふが如し。然りと雖も、國のため、君のために之を起す。全く身の爲め、家のためにして之を起さず。志のいたり、神靈そらにあり。頼もしきかな、悦ばしきかな。伏して願くは、冥顯威を加へ、靈神力を合せて、勝つことを一時に決し、譬を四方へ退け給へ。

一五(68)

Jan. 22

大意ヲ平易ナル口語ニ譯シ傍線ノ所ヲ解釋セヨ

「大正四
海軍機
關」
徒然草
師(兼好法)

二 曩に、敵國盟を渝へ、旗鼓相見ゆるに當り、陛下宵旰精を勵まし、親しく六師の

K. Wada

一 飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしびゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬのらとなり、かはらぬ住家は人改りぬ。

同上

節度を綜べ給ふ。

同上

「同上」
官報
皇の詠

三 大駕奄ち登還して、永く兆民を棄てたまひ、靈柩咫尺に在して、御容長へに人天を隔つ。

同上

「同上」
職臺雑話
室鳩巢

四 孔明は臥龍なり。道德を懐抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終へんとせしに、はからざるに、蜀の先生の三顧に遇ひて、已むことを得ずして出で仕へしが、一朝關趙が上に立ちて、君臣水魚のごとくなりき。

一六(69)

解

筆を執れば物かかれ盃をとれば酒を思ひ養をとれば攤うたんことを思ふ心は必ず事にふれて来るかにも不善の戯をなすべからずあからさまに聖教の一句を見れば何となく前後の文も見ゆ卒爾にして多年の非を改むることもありかりに今この文をひろげざらましかば此の事をしらんやこれすなはち觸るる所の益なり。

五一

「大正四
海軍機
關」
徒然草
師(兼好法)

「大正四
定」専門
檢

一七(70)

五二

一 率直にして邊幅を修飾せず。
同 上

「同上」
神皇正統
記(北畠親
房)

二 言語は君子の樞機なりといへりあからさまにも君をないがしろにし人におごることあるべからず。こゝにこそ堅き氷は霜をふむより至るならひなれば亂臣賊子といふものはそのはじめ心詞をつつしまざるよりいでくるなり。

第五課

一(71)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正五
各高等」
十訓抄
(不詳)

一 人々よりあひてさるべき遊などせんにはたとひ身にとりて安からず口をしき事にあひたりとも構へてその日のさはりあらせじとはからふべきなり其の人のありてし

かくの事さめにきといはるる口惜しきことなり。

同上

「同上」

二 故きを温ねて新しきを知るといふ意こそかぎりもなくめでたけれ何ものか歴史のうちよりわき出できたらざらまし本に遡りて末をしり流を逐うて海に入る始を究めて終を要むるにのみ今ゆくするの道ぞあらはれぬべき。

同上

大八洲雜
誌(賀茂
神社行幸
の記)大
澤正清

三 東に進ませおはしますままに御輦のいただきにするたる黄金作の鳳形のいときらきらしう翼うちひろげたるありさまのさながら飛びもかけりぬべう見えたるに四方にはへたる紅の御綱ははえくし打ちゆらぎつつ濃き紫の御帳は風にひらめきあひて目もあやなるに御簾のかつゝ見ゆるぞいかしこきや。

二(72)

解釋

かの人¹は雪螢あつめし窓に年を積みてふみ見る道に心をつくすなりされば世の中の事にはいとうどくあるなりといへばさるこそまことの道²まねぶ人なりけれどほめも

五三

4-76
25-57
134#105
12051015
「大正五
各高等」
十訓抄
(不詳)

信(松平定)

のするものありとや。されど眞には世の事にさどく今のみかは。千歳の前つ世のこと見ぬ。外國の昔今のさまよりさかり衰ふるさざしのくさくに至るまでも明かなるをこそ。道まねぶ人とはいふべけれ。

五四

三(73)

解釋

「大正五
東京高
師」
玉勝間
長
(本居宣)

近き世の人の文どもを見あつむるに一ふしをかしとめとまるはほどほどにあまたあめれどそれはたいかにぞやおぼゆるところまじりて大方きすなくとのひたるはをさを見えずここかしこえんなる言葉をつかひてかきちらしたるをば人のもてはやしほめたつれば心をやりてしたりがほすめるいとがたはらいたくをこがましくさへぞおもはるる。

四(74)

解釋

「大正五
廣島高
師」

一 明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。併し詔勅にはそれくの形式があり、聖意を承けて起草する人の

筆のまに
賀矢一(芳)

あることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽するの光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福であるのである。

同上

「同上」
更科日記
菅原孝
標の女

二 東に下りし親、辛うじてのぼりて、西山なる所に落ちつきたれば、そこに皆わたりにて見るに、いみじう嬉しきに、月のあかき夜、ひとよ物語などして、かかるよもありけるものをかぎりとして

きみにわかれしあきはいかにぞ

といひたれば、いみじく泣きて、

おもふことかなはずなどといとひこし

いのちのほどもいまぞうれしき。

五(75)

解釋

「大正五
東京女高

往古漢學の始めて我が邦に入りし時には、未だ假名の創作あらず、梵語音韻の學未

五五

東漸せず、當時の人は我が國固有の音韻言語あることに注意せず。世舉りて漢文の巧緻なるを羨み、及ばぬまでも、彼を擬へ彼に習ひ、終には我が自然の語脈語法を滅絶しても、仍漢語漢文の成遂を助けむと企てたりき。夫の日本書紀を見よ。我が古傳の言語を斧鑿して、漢様に假裝せむと務むる外、他事なかりしが如し。其の後數十年を経て、漢語漢文は、終に我が國有の言語と密着し難く、我が國民に普及通行すべからざるにより、始めて梵語音韻の學を取りて、國字を作りたるものありて、今にも滅びんとしたる國語國文は、再び存活の路に就き得たりき。若し此の時國字制作の力によりて、漢文を變通することなかりせば、漢文の勢力は益々銳進して、終には安南朝鮮の國民が、なまじひに漢文を學び得たると同時に、文弱に陥りたるが如きに至りたらむも知るべからず。

六(76)

倭線ヲ施シタル箇所ヲ解釋スベシ

「大正五
東高
商一
徒然草
師(金好法)

若き時は血氣内にあまり心ものに動きて情慾多し身をあやぶめて碎けやすきことを玉を走らしむるに似たり美麗を好みて寶を費しこれを棄てて苦の杖にやつれいさめる

心さかりにしてもものと争ひ心に恥ぢうらやみ好むところ日々に定まらず色に耽り情にめで行をいさぎよくして百年の身をあやまり命を失へるためし願はしくして身のみたく久しからしむることを思はずける方に心引きて長き世がたりともなる身をあやまつことは若き時のしわざなり。

七(77)

解釋

「大正五
神戶高
商一
花月草紙
信(松平定)

よし言葉の花を咲かせたりとも、誠のつらぬくにあらざれば、えうなき事なり。されど誠もつらぬきて、言葉の色もそなはりなば、いとど人の心をも動かしつべければ、一やうに實だにあらば、花はなくてもありなむとはいはじ。

讀方解釋

市利を壟斷す

奇貨居くべし

魯魚の謬

有終の美

解釋

「同上」

御國の道のたふとくすぐれたる由を言ふべきはさる事にて、儒佛の道とは異なるふしをいふにつけては、其のふた道のあじきふしをいはではえあらぬすぢは、いひ

もすべきことなれども、ひたぶるにそれもかれも悪しといひて、はらひ退けむとするはわろしと思ふ。

八(78)

解釋

「大正五
長崎高
商」
増鏡
(不詳)

「同上」

一 しばのいほりのただしばしとかりそめにみえたる御やどりなれどさるかたになまめかしくゆるぎまてしなさせたまへり。

二 ふうつか、

に、會釋、

几帳、

敷衍、

胡籙、

造詣、

蜀魂、

唇吟、

「同上」

三 思入る、

覺へぬ、

休らう、

堪えず、

競ふて、

供えらる、

措段、

狼籍、

騰寫、

窮行、

狐疑、

網領、

九(79)

解釋

「大正五
山口高
商」
徒然草
(兼好法師)

されば一生のうちむねどあらまほしからん事の中にいづれかまさるとよくおもひくらべて第一のことを案じ定めてその外は思ひすてて一事をはげむべし、一日の一時の中にもあまたのききたらむなかに少しも益のまさらん事をいとなみてその外をばうち捨てて大事をいそぐべきなり何方をもすてじと心にとりもちては一事も成るべからず。

一〇(80)

解釋

「大正五
小樽高
商」
國文學全
史
(藤岡作太郎著)

西行は生れながらの歌よみにして歌を作るものにあらず天籟吹き來つて松濤即ち鳴るその聲必ず自然を離れず平易率直を旨とすれども風凄じければ鳴ることも亦強し時に婉曲の響あれどもことさらに人爲の巧を加へねば天成の詩美は千歳の下いよいよ光を増して後人をして渴仰止まざらしむ。

一一(81)

解釋

「大正五
米澤商
工」

つまづ世に四恩候ふ天地の恩國王の恩父母の恩衆生の恩是なりその中に最も重きは

平家物語
(不詳)

朝恩なり普天の下王土に非ずといふことなく率土の濱王臣に非ずといふことなし。

古人評論
(王陽明)
(未廣鐵腸)

○彼平生の大功皆此の明鏡止水の心より来る或人問ふ兵を用ふる術ありや曰く學問純篤此の心を養ひ得て動かざる乃ち術のみ凡そ人智の相去る遠からず勝敗の決は陣に臨みて後卜するを待たず只此の心の動くと動かざるとの間に在るのみ。

同上

○行方定めぬ浮雲は風のまにまに岫を出で入る世の榮辱を思ひ捨て境に従ひて物に着せず一生を行脚に送る身の心安さよ。

二二(82)

解釋一線ノ所ノ讀方、意義

「大正五
東北帝大
工」

都會は百事甚だ複雑にして何事も習慣の存せざるはなく、煩瑣なる繩規の行動を牽制するありて、造次も放心する能はず、固有の性格を發展して十分に成熟せしむるを得ざること多し。爲に四圍の風潮に従ひて漂蕩し、腐敗を歎じ、墮落を慨する

ものも、其の矯正せざるべからざるを唱へながら、漸次風潮に推し流されて齊しく腐敗墮落の渦中に盤旋する滔々として皆然り。

讀方意義

「同上」

二(イ)會得、

○指彈、

○從容、

○政所、

○親炙、

○外議、

○莊園。

二三(83)

解釋

一 冬はつとめて雪のふりたるはいふべきにもあらず霜などのいと白きまたさらでもいとさむき火などおこして炭もてわたるいとつきづきし。

同上

「大正五
北海道帝
不農」
枕草紙
(消少納
言)

二 大事を思ひたたん人は去りがたき心にかからん事のほいをとげずしてさながら捨つべきなりしは此の事はておなじくはかの事沙汰しおきてしかくの事人の嘲やあらんなど思はんにはえさらぬ事のみいとどかさなりて事のつくるかぎりもなく思ひたつ日もあるべからず。

同上

「同上」

三 さげすむ、
竟宴。

あるじす、

いぶせし、

みそぎ、

善智識、

追儼、

灌頂、

山崎の

六二

一四(84)

現代の口語文に書キカヘヨ

「大正五
鹿兒島高
農」

役威傲り尊大驕奢之所行堅く誠之村内百姓どもより申出る儀を是非をも不分さし押へ情實を上達せず或は公事訴訟等に付賄賂を請依怙之取計等致間敷方正廉直を旨とし條理明に可取計事。

一五(85)

句讀濁點ハ漢字ハ意義

「大正五
水産講習
所」
神皇正統
記
房(北島親

信賴かたらひおきける近臣等の中に心かはりのする人々ありて主上上皇をしのひていたしまつり清盛が家にうつし申してけりすなはち信賴義朝等を追討せらるほとなくうちかちぬ信賴はとらはれて首をきらる義朝は東國へこころさしてのかれしかと尾張のくにうたれぬその首を梟せられにき義朝重代の兵たりしうへ保元の勳功すてかたくはへりしに父のくひをきらせたりしこと大いなるどかなり古今にもきかす

和漢にもためしなし勳功に申しかふどもみつからしりそくともなとか父を申したすくる道なかるべき名行かけはてにければいかてか竟にその身をまなくすへき。

一六(86)

傍線ノ語ノ讀方

「大正五
陸士」
本注物語
(不詳)

一 高¹雄の神護寺と申すは寧樂¹の御代に建立ありし伽藍なり。久しく修造の權越もなかりしかば、扉は風に倒れ葺は雨露に曝されて、御厨も露はに見え給ふ。

解釋傍線ノ語ノ讀方

二 左衛門督光賴卿は、清げなる雜色召し具し、前高らかに追はせて參内あり。殿上に入りて見給へば、信賴卿一座して、其の座の上薦達皆下にぞ著かれたる。光賴卿、こは奇怪の事かな。今日の御座席こそ、よにしどけなう見え候へと色代して、しづしづと歩み、信賴卿の上にもむづと著き給ふ。

解釋

三 菅原の大臣の冠し侍りける夜母のよみ侍りける「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。」

「同上」
拾遺和歌
集雜の歌

漢字ニ讀方ヲ附シ、且ツ口語文ニ直スベシ

「大正五
海兵一
四季物語
(鴨長明)

内裏のさま、昨日は紙屋川の祓、今日は我が御社の競馬などに、こころ立ち居籠みたる人の足見るもまばゆし。菖蒲蓬を百敷よりはじめさらぬ民の戸にも挿みて、長き根に添へたる君が千歳、松の齡はさることにて、改りたる壽草、今日あらたなる

先。天皇 御 天 皇

傍線ヲ施セル箇所ヲ解釋セヨ

「大正五
海軍機
關一
官報一
御
勅語)

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ、開國ノ宏謨ヲ定メ、祖訓ヲ紹述シテ不磨ノ大典ヲ布キ、皇圖ヲ恢弘シテ曠古ノ偉業ヲ樹ツ。聖德四表ニ光被シ、仁澤遐陬ニ霑洽ス。

同上

「同上」
西郷隆盛
に與ふる
書(山縣
有朋)

二 天下不良の徒は、君が山林に韜晦したるを奇貨とし、これによりて功名を萬一に僥倖せんとするの念を懷き、其の辭を巧にしてひたすら朝廷の政務を譏誣し、君に説くに、君出でずんば蒼生をいかにせん、君にして義兵を擧げなば天下靡然として

これに向はんとの旨を以てせしならん。

同上

「同上」
平家物語
(不詳)

三 此の卯月二十日餘の事なれば、夏草のしげみが末を別け入らせ給ふに、西の山の麓に一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。古く造りなせる泉水木立、よしある様の所なり。蔓破れでは霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈をかかぐとも、かやうの所をや申すべき。

解 釋

「大正五
海軍經
理一
保元物語
(不詳)

一 藏人資長朝臣を以て義朝に仰せ下されけるは汝が弟どものいまだ多くあるなるをたとひ幼くとも女子の外は皆尋ねて失ふべしとなり義朝宿所に歸り秦野次郎を召して宣ひけるは餘りにふびんなれども勅誕なれば力なし母かめのとか懷きて山林に逃げ隠れたらんはいかがせん六條堀河の宿所に在る當腹の四人をば賺し出して相構へて途の程わびしめずして舟岡にて失へどぞ聞えける。

同上

「同上」

二 (イ) 吹く風をなこそその關と思へども道もせにちる山櫻かな。(源義家)

(ロ) 武夫の矢なみつくろふ小手の上に霞たばしる那須の篠原。(源實朝)

二〇(90)

一線ノ部分ヲ解釋セヨ

「大正五
東京外
語」調言
(幸田露
伴)

大丈夫苟も身を學藝に委ねんとせば先づ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す受とは内の外に受くるなり發とは内の外に發するなり受くることは須らく大海の百川を呑むが如くなるべし發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし受くることの多からざらんことを是れ厭ひて川の大川の小を嫌はず發することの豊かならざらんことを是れ恐れて方の東方の西を問はず是を受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす受くるに嫌ふ所あり發するに問ふ所あるは兒女の情のみ大丈夫の覺悟にあらず。

二一(91)

傍線アル部分ヲ解釋セヨ

一 言論の自由社會に存せず、編史の業政務の一部たりし世に在りては、史氏興朝の

「大正五
專門檢
定」
史筆の公
三正(鳥田
三郎)

爲に回護の筆を執るが故に、記事に曲筆多く批評に公正を得難かりしなり。その積習の風を成すや、何等の拘束なき人がこの時期既に去りたる世に在りて筆を執りても、亦成敗と是非とを混同してみづから曉らず。陋といふべし。

解釋

「同上」
増鏡
(不詳)

二 義時、泰時を前に据えていふやう「おのれをこのたび都にまゐらすは思ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろ見えなむには親の顔また見るべからず。今を限と思へ。いやしけれども、義時君の御ためにうしろめたき心やはある。されば、横さまの死をせむことはあるべからず。心をたけく思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄箱根は越ゆべしなど、泣く泣くいひきかす。

同上

三 北馬南船行李卸さざるところなく、春花秋月遊展遍からざるところなし。

第六課

一(92)

「同上」
頼山陽論
(朝比奈
知泉)

「大正六
各高等」
玉勝間
長（本居宣

ことわりならぬふるまひをしてあながちに富を願はむこそあしからめほどに
つとむべき業をいそしくつとめてなりのぼり富み榮えむこそ父母にも孝行ならめ身
衰へ家貧しからむはうへなき不孝にこそありけれ。

同上

「同上」
花月草紙
信（松平定

二 月の出づる程曙の空おぼえて横雲のたなびきたるにややにはひ初めたれど遠山の
梢にいざようて顔も見せず辛うじてさしのぼりたるがいつしか待居顔に棚引きたる
雲に入りぬるぞいとつらき。

同上

「同上」
遊京漫録
臣（清水濱

三 土さへ裂くる心地したる程はことはりの暑さに思ひなしてさまでも覺えざりしを
ろそぎ川に流しやりつるやうに思ひ捨てたる夏のなごりまたもたちかへりてきのふ
けふとなりてはなかに堪へ難く覺ゆるよ。

二 (93)

解釋セヨ

「大正六
各高等」
權國文集
足（中島廣

いと若かりしほどより身のおこなひの心得にとてをりし聖賢の書をよむたびにそ
の教をげにさることぞと思ひしんじていかでさやうにせばやと志して年へにけ
ればつたなくてはなし得ぬものからわが身のためとなりぬることいと多かり。

三 (94)

解釋

「大正六
東京高
師」
玉かつま
長（本居宣

大かたよのつねにことなる新しき説をおこすときにはよきあしきをいはずまづ一わ
たりは世の中の學者にくまれそしらるるものなりあるはおのがもとより來つ
る説といたく異なるを聞きてはよきあしきを味ひ考ふるまでもなく始よりひたぶる
にすてて取りあげざる者もありあるは心の中にはげにと思ふふしも多くあるものか
らさすがに近き人のことに従はんことのはげに思ふふしも多くあるものか
ぬ顔して過す類もありあるはねたむ心のすすめるは心にはよしと思ひながら其の中
の疵をあなたがちに求め出でてすべてをいひつけたんとかまふる者もあり。

四 (95)

解釋

平早ナル口語ニテ解釋セヨ
六八

「大正六
廣島高
師」
關の驛
（本居大
平）

「同上」
慶長見聞
集
（三浦茂
信）

「大正六
東京女高
師」



同上

一 め¹かり鹽やくあまならね²どいなき世³のなりはひにかかづらひていぶせき⁴苦屋の
うち⁵に年をへつつをりをりの人の物がたるにつけても都の有様ゆかしく又ふるごと
に見ならひたる野山のすがたもいつしかいかでと思ひわたりつるにどしごろむつび
かはす人のとみに物⁸することありもろどもに出でたちなんやとさそひつるままにな
んこよひは十月十日土山といふ驛になんやどりける。

二 大才博士に書を覺え詩文を作り辯舌たれる計にて賢人とは心得べからず首陽山は
倒れて平地となるとも伯夷叔齊賢名は失すべからず是誠の賢人なり先哲の言葉にも
外に賢善精進の相を顯すことを得ざれ内にこれをいだけばなりといへり賢人は時を
知つて國に仕へ時を見て山に入る樹下石上にあつて心を安くし萬事無心一釣竿三公
にもかへすこの江山と己が心を養へり。

五(96)

傍線アル辭句ノ讀方及ビ略解ヲ記シ、然ル後全文ヲ通釋スベシ
去年の夏の末なりき。行きゆきて奥州平泉の里に歩みを止めつ。東北の地白帝鶴を

11-11

「大正六
東京高
商」
年々隨筆
（石原正
明）

廻らすこと早ければ。初秋の風征衣の袖に音づれて、夕暮の雲低くたち迷へり。眺
むれば利³鏃いたづらに田園にくだいて、寶刀むなく土塊の中に埋もれぬとおぼし
く、行きかふ人の姿も見えねば、野末にきこゆる葦のそよぎならでは、ことごとく
すがもなし。中尊寺のほとり流轉のあとわびしく、……螺鈿珠玉を箴め、描金黒漆
を塗り、七寶莊嚴にして渾然たる金色、さしもきらびやかなりし光堂も、七百年の
春秋を重ねて、杉の木立に寂しう立ち残り。まして毛越寺のかたはら蘆荻池を埋
めて、颯々たる松風、¹¹旅客の心を痛ましむる所、いづこよりともなく漂ひ來る梵唄
のうら悲しさ、……山川依稀として存すれども、朱欄玉樓の礎今いづこにかある。

六(97)

傍線ノ箇所ヲ解釋セヨ
鳥獸はなく聲に遅速緩急大小高低ありて喜怒哀樂の勢をうつすなるがづぶくと物
語するばかり下の情を通ずるものなりおのがどち通ふ詞ありて啼きつつ物語するに
はあらず鹿雀雲雀鶺鴒などの笛によるにてしるし笛の音に言語あるべきにはあらぬ
ど遅速緩急高低大小をうつす故鳥獸もしかぞとおもひてよるなり公治長が鳥語に通

Handwritten signature and the number 71.

じたりといふ説はよしなき事なり。

七(98)

解釋

「大正六
神戶高
商」

一 如何に世界が力を崇拜すればとて、人界は獸界にあらざるなり。如何なる力を以てするも、道理の容さざる力の妄用は、必ず何れにか躓く所なきを得ず。孟子が所謂、覇者は仁を假ると云ひしは、假らざるべからざる必要あればなり。其の必要の存する所に於て、正義其の物の、人事より除却すべからざる所以を知るに足らむ。

同上

「同上」

二 おやおほぢの御事詳ならざりし事こそくやしけれど、今は問ふべき人とてもなし。此の事のくやしさに、我が子どもも、またわが如き事のありなむことを知りぬ。今は暇ある身となりぬ。心に思ひ出づるをりく、過ぎにし事ども、そこはかとなくしるしおきぬ。

同上

「同上」

三 世界を家とする氣象は、先づ世界を師とするより來る。愛國の眞精神は、自足傲

慢の裡に宿らずして、謙虚益を求め、精進自ら息まざる中に存せずんばあらず。

同上

「同上」
玉勝間
本居宣
長

四 すべて新なる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきどほりて、たがふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。

八(99)

釋解

「大正六
山口高
商」
鴨衣
有(橋井也)

一 蚊は憎むべきかぎりながらさすが卯月の頃端居めづらしき夕はじめてほのかに聞きたる又は長月の頃力なく残りたる寂しき方もあり蚊帳つりたる家のさま蚊遣焚きをる里のさまなどかつは風雅の道具となれり蚊蚊は殊にはげしきをかの七賢の夜はなしにはいかに團扇のひまなかりけん。

竹林の七賢

同上

「同上」
櫻園文集
足(中島廣)

二 あまの住家ばかりあはれなるものはなしいと便なき海邊の風もたまらぬ松蔭などにただかりそめに造りたる藁屋どものさま浪うち寄せなばやがて流れも失せぬべう。

いとはかなげに見ゆるを繪に書きさびたるなどはなかなかにをかきものからさ
て住みなばなに心地かせましと思ひやるだに心細し。

九(100)

普通文體ニ書き改ムベシ

「大正六
小樽高
商」

一 花は色々にはへどもあるじとたのむ主もなく月はよなくさし入れどもながめて
あかす人もなし昔は玉の臺をみがき錦の帳にまとはれてたへなる御身にて渡らせ給
ひたりしかども今は有りとし有る人にも皆別れ果てさせ給ひてあさましげなるうち
坊に泣々立ちいらせ給ひける御心の中おしはかられて哀なり。

大意ヲ述べ傍線字句ノ讀方及ビ解釋ヲ記セ

「同上」

二 烟立つ螢のとま屋にやく鹽のからき浮世を如何に渡らむ

斯く口占みつつ節を以て砂上に書き置きぬあ砂上の文學の夜潮の來るに従ひ漣
の裡に没し去りたらむ。

一〇(101)

解釋

「大正六
米澤高
工」

一 (イ) 自然を師とするものは自然を解する法を知らざるべからず自然を解する法唯己
を虚しうするにあるのみ。山岳の瑰琦河海の浩茫風雲雷霆の奇觀心を虚しうして
これに對すること久しければ一氣おのづから恍惚として直に造化の樞機に參し

身世共に逃れ去りて天地我と一體たり。
(ロ) よろづの事は始終こそをかしけれ望月のくまなきを千里の外まで眺めたるより
も曉近くなりて待ち出でたるがいと心深く青みたるやうにて深き山の杉の梢に
見えたる木の間の影うちしぐれたるむら雲がくれのほど又なくあはれなり。

一一(102)

解釋—線ノ所ノ讀方、意義

孔子既に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、
狂瀾を既倒に回さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして、四方を
漂浪すること十三年。時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。
ここにおいて、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼わ
が道遂に窮す、世遂にわれを知る者なきか」と。

「大正六
東北帝大
工」
「樗牛全集
世界の
四聖の
高山林
次郎」

「同上」
徒然草
兼好法
師

「同上」

二 朝三暮四、

口道破、

外戚、

二入魂、

墨守、

慰藉、

晝夜兼行

一三 (103)

「大正六
桐生染
織」

一 風風ぎ何處ともなく春意動きて早咲の梅五六輪村路の籬に香る頃田越の橋に行ゆば點綴せる人家の間に纔に青める麥圃を辿りて四つ手網の數五つ六つ近きは大きく遠きは籬の帳よりも小さく川の形に屈曲して悠々として日光に掛る。

「同上」
平家物語
(不詳)

二 二月廿一日主上異なる御恙もわたらせたまはざりしをおしおろし奉りて春宮踐祚ありこれも入道相國よろづ思ふさまなるが致すところなり時よくなりぬとてひしめきあへり。

「同上」
徒然草
(兼好法師)

三 人の終焉のありさまのいみじかりしことなど人のかたるをきくにただ靜にして亂れずといはば心にくかるべきをおろかなる人はあやしくことなる相を語りつけいしことばもふるまひもおのれがこのむかたにほめなすこそその人の目ごろの本意にもあらずやおぼゆれこの大事は權化の人も定むべからず博學の人もはかるべからず。

す。おのれ違ふところなくば人の見聞くにはよるべからず。

一三 (104)

解釋

「大正六
秋田鐵
山」

かの里人共もここにきて國はいづくにかおはするなどいひつ。此の山のふるごとどもなどかたりいづるいとゆかしくて耳どめてきけば大かたここによしなき神代のことのみにてさもと覺ゆるふしもまじらねばなほざりけききすごしぬされど見えわたるところをそこかしこととひきくにはよき博士なりけり。

一四 (105)

解釋

「大正六
北海道帝
大農」

一 いでや水を見よ荒海のしほのみちひも山がはの瀧つはやせも鏡なす池の面のさざ浪も水の心にかはることやはある廣きには深く早きには勢つよく所せきには自らこまやかにほどほどにそのけぢめ見ゆるぞかし人の心おきてもまたしかぞあるべき時なるをりはつかへの道にいそしかりしも時失はば又しづけさを樂み世につれ時に隨ひてうきしづむ世の淵瀬を安く流れ渡るこそ行く水の清き心とはいふべけれ。

「同上」

解釋及讀方

二 12 6
 四阿、
 一五 106
 軒輕、
 細戈不足、
 節會、
 日中の
 月

「大正六
 上田露
 徒然草
 兼好法
 師」

一 1
 さしたる事なくて、人のがり行くはよからぬことなり。用ありて行きたりともその事はてなば疾くかへるべし。人と對ひたれば、詞おほく身もくたびれ、心しづかならず、萬の事はりて時をうつす、たがひのため益なし。いとほしげにいはんもわろし。心づきなからんをりは、なかなかそのよしをいひてん。

「同上」

二 4
 熱鬧、
 遺俗、
 成算、
 參差、
 車駕、
 旗本、
 一六 107
 杯

句點、濁點、一ハ説明 二ハ讀方 三ハ讀方、漢字

「大正六 水産講

左門云秋はいつの日を定めて待つべきやねかふは約し給へ赤名云重陽の佳節をもて

習
 雨月物語
 成
 上田秋

歸來る日とすへし(中略)九月にもなりぬ九日はいつよりも疾く起き出て草の屋の席をほらひ黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し壺をかたふけて酒飲の設をさす老母いふかのやくもたつくこは山陰のはてにありてここには百里を隔つるときはけふとも定めかたきに其の來しを見て物すとも遅からし左門云赤名は信ある武士なれば必ず約を誤らし其の人を見ておぼたたしからんことの恥じとて美酒を沽ひあさむきを止て厨にそなふ。

一七 (108)

日本
 赤名
 重陽
 佳節

「大正六 陸士」

讀方、意義

一 1
 頼光の四天王と聞えたる武士の中に公時といふは慮深くてむねとある者なりけり新參の綱といふが心の剛にならんやうを問ひけるに答へて勉めて臆病を言へと言ひければ綱胸を開きけり必ずしも臆病になれとはあらず身を重くし心を長くしてたばかりをよくせよとの心なり。

讀方、意義

銀鑿、
 寒暄、
 檢覈、
 黜陟、
 悖德、
 七

「同上」

二 人世信によりて立つ信なくんば小事といふとも成らじ。況んや彼の請詐を以て物に當り偽妄を以て事を爲し糊塗苟も免れ依違轉ら避け朝三暮四首鼠兩端の模稜手を常套として却つて嘘も方便と空嘯くが如きは其の倭その陋豈唾棄すべきものならずや。

一八(109)

傍線ノ語句解釋(二)(三)モ同シ

「大正六
海兵」
「太平記」
(不詳)

一 兵革の後蠻夷未だ心服せず本枝猶ほ根を堅うせざるの間、竹園を東國に下し奉り已に柳營を塞外に苦しましむる所に、尊氏超涯の恩澤に誇つて、家を興し、威を立てんと欲す。潜上無禮の過遁るるに由なし。

「同上」
「平家物語」
(不詳)

二 熊野の別當湛増は、平家の御恩を天山に蒙りたれば、如何でか反き奉るべき。矢一つ射かけて、其の後港へ仔細を申さんとして、ひたかぶと一千餘人、新宮の都へ發向す。新宮には鳥居の法眼以下都合その勢一千五百餘人、関つくり矢合せして、源氏の方にはどこそいれ、平家の方にはかくこそいれど、互に矢さけびの聲の退轉もなく、鏑なりやむ隙もなく、三日の程こそ戦つたれ。

「同上」
「増鏡」
(不詳)

三 心たけくすくよかなるものにて、河内國におのがあたりのいかめしくしたためて、このおはします所もしあやふからんよりは行幸をもなしきこえんなどよいししけり。

一九(110)

傍線アル部分ヲ解釋セヨ

「大正六
東京外
語」

皇室中心主義を宣揚して國威國權を伸張し、東西文明を融合して宇内人類の幸福を増進し、日支兩國の結合を鞏固にして東亞興隆の基礎を確立し、帝國の使命を全うすべき軍備の充實を圖り優秀なる社會政策を執つて産業を興起し、國富民財の増殖と堅實なる社會生活を遂げしめ、國費負擔の實際的平等を得べき。税制の根本的釐革を實行して貧富の懸隔を調和し、地方自治の圓滿なる發達を計りて國家の根柢を堅實にし、中央地方の政務をして簡易敏活ならしめ、以て帝國の世界的發展を企圖せん。

解釋

二〇(111)

必和於之矣
其由也

「大正六
神宮皇
學」
大和俗訓
軒(貞原益)

一 暇ある人さびしさのあまりに暇なく時を惜む人のもとに來り心のどけくよしなき長物語し主人にいとほるこそむげに心なきわざなれされどかかる人に對せんとさわが心かなはずともひたすらに面のけしきあしく詞づかひ不順なるべからず。

○よしや身は西海の藻屑とはてもせよ藻しほ草かきのこしたる歌の一つだに。残らざらんには見はてぬ夢の何ほう口惜しかるべき。
○世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くなりにけるかな。

「同上」

二 ①大内山、②辰の刻、③あさまし、④ていたらく。

二二(112)

「大正六
專門檢
定」
徒然草
兼好法師

一 げにげにしく所々うちおぼめきてよく知らぬよししてさりながらつまづま合せて語る虚言は恐しきことなり我がため面目あるやうに言はれぬる虚言は人いたくあらがはず皆人の興する虚言は一人さもなかりしものをと言はんも詮なくて聞き居たる

「同上」
頼山陽論
(朝比奈
知泉)

程に證人にさへなされていどど定まりぬべしともかくにも虚言多き世なり。
二 山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り章句訓詁の末を争ふ風なかりしは詩才の發達に便なりしなるべしと雖もかの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては山陽亦その常套を襲ふを免れず。
三 上達部、¹⁰けちめ、¹¹うたげ、¹²彈劾、¹³妥協、¹⁴春宮、¹⁵品さだめ、¹⁶めのと
¹⁸あなうたて、¹⁹乾盃。

第七課

一(113)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ、(二)(三)モ同ジ

「大正七
各高等」
初稿集
(本居内
遠)

一 春の花には限なき影をも添へまほしく秋の月にはかぐはしからん色をもと思ふは皆人の心にや水無月の暑さに堪へかねては冬をたしむ雪降る夕をかこちては夏こそしのぼるれよそめ床しきたまだれのうちにも朝夕に住み馴れなば野山の庵をも慕はじやは。

「同上」
徒然草
兼好法師

二 萬の道を學ぶに。これかれの人の同じ師につきていそしむ年月の同じ程なるに。その道を得ると得ざるとのけぢめこよなきは。大かたの心のおめなるどさしもあらぬに。よりてなり。

「同上」
東關紀行
(不詳)

三 熱田の宮を立ち出でて濱路におもむくほどありあけの月影ふけて。ともなし千鳥とさくおとづれわたり旅の空の愁すすに催してあはれかたがたふかし。

二 (114)

漢字ノ讀方、解釋

1 毀譽褒貶の海ともいふべき世の中に生れながらは。かなき人の品定に頓着するは。初心の至なり。但し必ず感謝して受くべきは。悪評なり人間は。誰も自矜の心あるを免れず。齒に衣着せぬ悪評を蒙ることなければ。兎角よい氣になりやすきものなり。人往々初ありて中終なく。或は初中ありて終なきは。諛評の爲に其の徳を壞らるるもの多ければなり。

三 (115)

解釋 (二)モ同ジ

「大正七」
愛知醫
徒然草
兼好法師
(兼好法
師)
「同上」

一 よろづの道の人たどひ不堪なりといへども。堪能の非家の人にならぶ時は。必ずまざることは。たゆみなく。慎みて軽々しくせぬと。偏に自由なるとの等しからぬなり。

四 (116)

解釋 (二)モ同ジ

「大正七」
東京高
師
増鏡
(不詳)

一 相模の守高時といふは。病によりて。いまだわかけれど。一とせ入道して。今は世の大事ども。いろはねご鎌倉のぬしにては。あめり心ばへなども。いかにぞやうつつなくて。朝夕このひものどては。犬くひ田樂などを。ぞ愛しける。

「同上」
出羽の秋
田の露の
かたに書
きつけた
る
(橋守部)

二 實めきたる。いつはりはいふとも。偽めきたる。實ないひそ。とはもの疑ひ深き世の人の心ぐせに。かなへる教へごと。なりこをなべての人うべ。人ど事の跡につきて。見もて行くに。世には實めきたる。偽より偽めきたる。實なん多かりける。

五 (117)

解釋

一 遂に隱岐國へ遷し奉るべし。とて三月の初の七日に都を出でさせ給ふ。今はと聞し召

「大正七」
廣島高

師増境
(不詳)

す御心まどひどもいへば更なり所々のなげき近う仕うまつりし人々の心地ども置所
なくかなし帝後醍醐も限なく御心惱むべし。いかうしも人に見えじ。と且は思ししづむ
れどあやにくに進みいづる御涙をもてかくしつ。おはしますふりにしことを思し出
づるにも立ち歸り又世を安くおぼさんこと。いと難ければよろづ今をどぢめにこそ
と思し廻らすに人やりならず口をしき契加りける前の世のみぞ盡せず恨めしき。

「同上」

- 二 (イ) いふも更なり、 (ロ) 公方様、 (ハ) 簀子、 (ニ) 下衆、 (ホ) 下乗、 (ヘ) 被、
- (ト) 堂上方、 (チ) 輪廻、 (リ) ひがごと、 (ヌ) 文月、

六 (118)

文中傍線ヲ施シタル辭句ノミヲ抽出シテ解釋シ又漢字ニハ讀方ヲ附記スベシ

「大正七
東京女高
師」

梅に取るべきは其の香、奇古なる其の幹。花の色は白きを尙ぶ。赤きは俗なり。一
園内に行儀正しく列植するは、折角の梅花を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影を清淺の
水に横へ、黄昏一片の月を添へて、暗香四野を浮動す。春の花の大觀は、梅と櫻と
に盡きたれど、春信まづ福壽草にやどるも可憐ならずや。桃紅李白世に俗なりと言

ひふらされたれど、場所によりては趣あり。椿の花水に落ちて、波輪を起すも、閑
適の趣なしとせず。

春雨また春の一觀たらずんばあらず。大空は霞むとも雨降るとも未だわかぬまに青
柳の糸はや玉ぬきそむとは、契仲の詠せし所、簀きて下す笈士に、かすむ朝の雨を
知るとは、千蔭の歌に入りし所なり。ふるとも見えぬ雨に、黄塵收り俗客去りて、
天地自らしめやかなり。閑窓の下、靜に碁に對して、一層の幽寂を感ず。

七 (119)

傍線ヲ附シタル箇所ヲ餘白ニ解釋スベシ

「大正七
東京高
商」とはすが
たり(中
井鑿庵)

旅はあはれなるこそよけれ、年へてのち其の時の友人など相語らふにも、その渡
舟にて雪にあひつ、かしの山にて雨にぬれて、とまりかねてなど言ひ出づれば、
身にしてみてをかしようも覺え、よろづ心になはぬ折ふしも、うき旅のさいつ頃、あ
るじのつれなかりし、飢ゑつ、こごえつなど、思ひ出せば、驕の心皆消ゆ。家富め
らん際は、ひと日ふつか外へまがるにも、くひもの調度缺くることなく、思ふやう
にしてところ用意すらめ、ただ家にのりでも行けかし、物打合はぬ中にこそ興ある

事も有るなるをどむげに覺ゆるを、⁶ 儲も猶心ゆかぬかたもあるべければ、⁵ 猶つらしどかこつ時もあるべし。さは言へ、つれだつ人のもの軽くて、極めて用ある調度など用意して、これ使へどてさし出したる、折につけていとよし。かしこに知る人、あるじの心むづかしからず、食物きよく湯などひかせ、⁷ 夜の衾心づかひしたる、うれしきものにぞある。

八(120)

解釋(二)(三)モ同ジ

「大正七
神戶高
商」
平家物語
(不詳)

一 大臣殿(宗盛)「都を出でて今日だに過ぎざるに、はや人々の心どものかはりゆくうたてさよ」とぞのたまひける。新中納言知盛の卿「行末とても頼もしからず、ただ都の内にて、いかにもならせ給へど、さしも申しつるものを」とて、大臣殿の御方を、世にもうらめしげにぞ見給ひける。

「同上」
神皇正統
記(北島親
房)

二 北條泰時心正しく政すなほにして、人をはぐくみ物におごらず、公家の御事を重くし本所(領主)の煩をとどめしかば、風の前に塵なくして、天下則ちしづまりき。……子孫はさほどの心あらじなれど、堅くしける法のままに行ひければ、及ばすな

がら代をも重ねしにこそ。

「同上」

三 (一) 誰か鳥の雌雄を知らん、 (二) 自暴自棄、 (三) 好事門を出でず、

(一) 藍より出でて藍より青し、

九(121)

「大正七
長崎高
商」
平家物語
(不詳)

一 果報こそめでたくて、今、大臣の大將に至らめ。容儀體佩人にすぐれ、才智才覺さへ、世に超えたるべきやは」とぞ、時の人々感じあはれける。

「同上」

二 寒胃、鏗鏘、撰擧、戒飾、綵装、收獲、言語同斷、
三々五々、淘冶、續釋、詮衡、糊口、
一〇(122)

文章ノ大意及ビ傍線ヲ施シタル語句ヲ抽出シテ解釋スベシ

「大正七
山口高
商」

我が國の詩文人の四季に對する感想はおしなべてかたよりたり彼等昔は春秋の優劣を風流心に分けかねむをいつしか秋の色をひとへに悲しとのみ見とりて秋の七草

「同上」
徒然草
兼好法師

二 雪のおもしろう降りたりし朝人のがりいふべきことありて文をやるると雪のこと何ともいはざりし返事にこの雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどのひがくしからん人の仰せらるる事聞き入るべきかはかへすがへす口惜しき御心なりといひたりしこそをかしかりしか今はなき人なればかばかりのことも忘れがたし。

一四 (126)

一ノ部分ノ解釋 (二)モ同ジ

「大正七
明治專
門」

一 人の趣味は人の面の形の異なり、聲の色の異なるが如くに、千差なり萬別なり。自を以て他を律すべからず。彼に従ひて之を枉げんも亦難し。趣味は人々の心の花のおのづからなる色なればなり。花を染めて本の色ならぬ色を作り、花を洗ひて本の色ならぬ色を作さんとすとも、誠にそれ何の甲斐あらん。されどもそれらの花は培ひ養ひ、よくくおほしたてて、その自然の色を春秋の天の下に、心ゆくばかり豊に放ち舒びしむべし。人々の趣味は培ひ養ひ、よくくおほしたてて、その自然に基く趣味の香をおほどかに世に發ち薫らしむべし。

「同上」

二 花風の期間は短く、葉風は長し。長きは珍らしからず。珍しからざれば出でて遊

「同上」

ぶを欲せず。而も心を娛すに宜しく、氣を養ふに宜しく、最も體を健にするに宜しきは、翠色綠陰に若かざらん。松や杉や檜や樅や、千本萬本に參るは、即ち自由の氣の磅礴して鬱積するを覺ゆ。自由が山中より出でしとは、單に文字の末に止らじ影搖千尺龍蛇動、聲撼半天風雨寒といふ類、誠に大丈夫を形容するに足らずや。花は悦ばしきも、常に満開ならば、幾人か之を趁ふべき。綠陰を趁ひて逍遙するは、凡衆の樂まざる所を樂む者、眞に幸なる哉。

讀方、意義

- 二 (1) 俊髦、(2) 述懷、(3) 照會、(4) 聲言、(5) 數奇、(6) 窮措大、(7) 唇齒輔車
- (8) 多々益辨、(9) 枉尺直尋、(10) 先憂後樂

一五 (127)

解釋 (二)ノイモ同ジ

一 朝夕へだてなく慣れたる人の事ある時に我に心おき引きつくるへる様に見ゆるこそ今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど猶げにげにしくよき人かなどぞおぼゆる。

「大正七
北海道
大農
徒然草
兼好法師
脚」

「同上」
増鏡
(不詳)

「同上」

二

御住居どもはそれまでと月日を限りたらむだに明日知らぬ世のうしろめたさに
いと心細かるべしまいていつを果とか廻りあふべき限だになく雲の浪けぶりの
波の幾重ども知らぬ境に世を盡し給ふべき御さまども口惜しと云ふも愚なり。
①そぞろなるそらごと、
②衣鉢、逸物、伏勢、押領、嬰鏢。(讀方ヲ各々其右ニ記スベシ)
③あはしむすぼる、
④かづけもの、
⑤事そぐ、
⑥時めかす

解 釋

一六 (128)

老い

三月廿五日

「大正七
東京帝大
農十訓抄
(不詳)

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて、かの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照り
て、民の歎淺からざりけり。神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉る
べきよしを、國司頻にすすめければ、

天の河苗代水にせきくだせあまくだります神ならば神
と詠みて、みてぐらに書きて、社司して申しあげさせたりければ、炎旱の天俄に曇
りわたりて、大いなる雨降りて、枯れたる稻葉、おしなべて緑にかへりけり。忽ち
に天災を和ぐる事、唐の真觀のみかどの、蝗をのめりし政にも劣らざりけり。能因

は至れるすきものなり。

都をば霞とともに立ちしかど秋かせぞふく白川の關

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さむ、無念と思ひて、人にも知れず久
しく籠りゐて、色を黒く日にあぶりなして後、陸奥の方へ修行のついでによみける
とぞ披露しける。

一七 (129)

傍線の部分ヲ口語文ニ改ムベシ

「大正七
鹿兒島高
農一
平家物語
(不詳)

判官大に怒つて今度鎌倉を立つて西國へ赴かんする者共は皆義經が命をば背くべ
からずそれに少しも仔細を存せん殿原は是より疾う鎌倉へかへらるべしとぞ宣
ひける與一重ねて辭せば悪しかりなんとや思ひけん左候はば外れんをば知り候ふま
じ御誕で候へば仕つてこそ見候はめとて御前を罷り立ちけり。

「同上」

二

(1) 自敬自重、(2) 公生涯、(3) 期成同盟會、(4) 達觀、(5) 融通、(6) 略痰、
(7) 蓄積、(8) 無雜作、(9) 得貴意度候。

一八 (130)

一線ノ個所解釋

或人いはく人は貴き賤しきをいはす物の心つかばわかくより主に仕へて私をかへり
み家をおこし身を立つる道をよく案じて何事につけても身を安くせず箕裘の業を宗
として其のかたの營みを相はげむべし。愚なる類は親のあまやかしめのものもてなす
にしたがひていつとなくかからんずるぞとのみ思ひてなりたむ末の事も辨へぬな
り。

一九 (131)

口語ニテ解釋セヨ

「大正七
上田 靈
縁」
徒然草
兼好法
師

人のかたり出でたる歌物語の歌のわろきこそほいなければ。すこし、その道知らぬ人
は、いみじと思ひては語らじ。すべて、いとも知らぬ道の物がたりしたる、かたは
らいたく、聞きにくし。

二〇 (132)

句點、濁點、一ハ説明、二ハ讀方説明、三ハ讀方漢字

「大正七
水産講
習」
神皇正統
記
北島親
房

高倉院は戊子のとし即位己丑に改元清盛權を専らにせしことはことさらにこの御代
のことなり其女徳子入内して女御とす即ち立后ありきするかたやうくどころど
ころに反亂のきこえあり清盛一家非分のわさ天意にそむきけるにこそ嫡子内大臣重
盛はこころはへさかしくて父の悪行などもいさめととめけるさへ世をはやくしぬい
よくおこりをきはめ權をほしきままにす時の執柄にて菩提院の關白基房の大臣お
はせしも中らひよろしからぬことありて太宰の權帥にうつして配流せらる妙音院の
師長の大臣も京中をいたさる從三位源賴政といひし者院の御子以仁の王とて元服は
ありしかと親王の官旨などたになくてかたはらなる宮におはせしを勧め申して國々
にある源氏の武士等にあひふれて平氏を亡はんとはかりけりことあらはれて皇子も
うしなはれたまひぬ賴政もほろひぬかかれとそれよりみたれそめてけり。

二一 (133)

解釋(二)モ同シ

一 (ア) 藤枝の宿を過ぐれば、程なく宇津の谷峠なり。昔在原の中將が、うつつにも夢
にも人にあはぬなりけりと詠じ給ひけん古き道の知らまほしさに、山畑に蕎麥

「大正七
陸士」

新古今和歌集
「同上」

二

(1) 人も安くねられざりけり。春の夜は花の散るのみ夢に見えつ。つ。
列る男に問ふに、知らずとのみ情無げにいらふ。伴なるたれ爪弾きをして
にくむもあれど、知らざるぞまことならんかし。世の中にあらんとする人は、
面をよくし、言を巧にするに、其のままに心得ることの遠はざるぞ少きなど笑
ふ。

(2) 人も安くねられざりけり。春の夜は花の散るのみ夢に見えつ。つ。
人のふるまひは、重らかに詞すくなにて、人をもならさず、人にもならされず
戯好まず、おとなしくふるまひ居たれば、心の中は知らず、よきものかなと見
えて、人にも羞ぢられ、所をもおかるるなり。かかれど、こはなつかしく思は
しき方にはあらず。ただ亂るべき所には亂れ、をりに随ひて戯をもし、をかし
き事も笑ひ、友に従ふ心ありて、わりなく思はれぬるには徳多かり。

「同上」

三

(1) 粉本、(2) 明府、(3) 詹石儲、(4) 騎虎勢、(5) 空谷梵音、(6) 繡雲霽雨、
(解 釋) 起請文。(讀方意義)

(1) 贖、(2) 購、(意義用例各一ツ)

三三 (134)
三 (1) 忌諱、(2) 倏忽、(3) 嬖倖、(4) 貪婪、(5) 譎居無聊、(6) 盤糶糶食(字音)

讀方、意義

「大正七
海兵」

一 (1) 欽定、(2) 揣摩、(3) 豺貅、(4) 杜撰、(5) 肯綮、(6) 私淑、(7) 饜饉、
(8) 巨擘、(9) 軒輊、(10) 白眉、

傍線アル語句ヲ解釋セヨ

「同上」
平治物語
(不詳)

二

(1) 當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴ひて、讒佞の輩に與せ
ざりしゆゑに、昔より今に至るまで、人にさしもどかる程の事はなかりしに
御邊はじめて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんことくらをしかる
べし。

増鏡
(不詳)

(2) 都にも、なほ世の中しづまりかねたるさまにきこゆれば、よろづにおぼしなく
さめて、關守のうち寝るひまをのみ、うかがひ給ふに、しかるべき時の至れる
にや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御けしきをほの心えて靡きつかうま
つらむと思ふ心つきにければ、さるべきかぎりかたらひ合せて、おなじ月の二

徒然草
(兼好法師)

十四日のあけぼのに、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。

(3) しな²⁴かたちこそ生れつきたらめ、心は²²なか、賢²³きより賢²³きにもうつさは移らざらん。かたち心さまよき人も、才²⁵なくなりぬれば、しなく²⁵たり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけおさる。

二三 (135)

讀方釋

「大正七
定」
専門檢

(1) 絶對の眞理、(2) 社會の木鐸、(3) 直情徑行、(4) 解脱、(5) 重籐の弓。

解義(三)(四)モ同ジ

「同上」
玉藤問
(本居宣
長)

二 すべてよき人とても稀にはことわりになはぬしわざもまじらざるにあらずあしき人とてもよきしわざもまじるものにていけるかぎりのわざことごとくによきあしきにさだまれる人はをさくなきものなるをいかでかはただ一言一行によりて人のすべてによきあしきをさだめいふべき。

「同上」
檀園文集
(中島廣
足)

三 遠山寺の入相の鐘ねぐらに歸る夕鳥もいつしか聲しづまりて向へる文卷もやうやう見えすなりゆくに心ゆくわたりはいとくちをしきものから暫しうちおきて端の方

にいづればかなたの山のはにわづかにあらはれたる三日月の影こそいとどをかしけれ。

「同上」
駿臺雜話
(室鳩巢)

四 藤房は公卿輔弼の臣たり正成は將帥禦侮の臣たりその材の大小をいはば正成の材藤房の及ぶ所にあらず藤房龍馬の諫は直言極諫朝廷を聳動せり誠に朝陽の鳳鳴といふべし然れども正成恢復の功とは並べ論じ難し。

第八課

一 (136)

平易ナル口語ニテ解釋セヨ(二)(三)モ同ジ

「大正八
各高等」
琴後集
(村田春
海)
「同上」
樂訓
(貝原益
軒)
「同上」
琴後集

一 よろづ何の業にも古よりしるべとなす法ありてそれによらざらむはまことの心を得がたくそののりを得たるはまめやかなりとて人もうべなふべし。

二 花は春とこそいへれど秋もまためでたき花おほし秋の花の久しきにたへてちりがてなるは春の花の見るほどもなくてはやくちるにまされり。

三 月にたよりよきは花にうとく水によしあるは山遙かにて四つの時のゆきめぐるに

海)村田春

したがひて心をやるべき住居はいともえがたしや。

二 (137)

讀方、解釋

「大正八
各醫專」

それ用兵の法一旦決然確立したる計畫を實行するに當り敵情に多少の變態を生ずとも斷乎として動かざること山岳の如き意志を以て之を遂行するを一の方法としたまた敵情の變化に應じて屈伸自在の戰法を用ひ所謂神出鬼沒敵をして端倪すること能はざらしめ之をして我が欲する所に隨從せしむるを他の方法なりとす。

三 (138)

解釋(二)(三)モ同シ

「大正八
慶應醫
大」

一 大方は知りたりともすすろに言ひ散らすはさばかりの方にはあらぬやと聞えおのづから誤もありぬべし。さだかにも辨へ知らずなど言ひたるはなほまことに道のあるじとも覺えぬべし。

「同上」

二 身は現象界と共に念々流轉しつつも心は卓然として靈界の氣を呼吸しここに人格の根底を据えて翻つて現象界の境遇を制し行かざるべからず。

「同上」

三 身外のもの皆天にして一塵の中能く天を見るべし。否近く自ら省みれば自身も亦これ天力の寓する一塊肉たるの埋を發明するに足るべし。

四 (139)

平假名交ノ現代文ニ改メテ解釋スベシ

「大正八
大阪醫
大」
神皇正統
記
北畠親
房

この天皇(後三條院)東宮にて久しくおはしましたければ、しづかに和漢の文顯密の教までも、闇からず知らせ給ふ。詩歌の御製も、あまた人の口に侍るめり。始めて記録所といふ所をおかれて、國々の衰へたることをなほされき。延喜天曆より以來には、誠に賢き御事なりけむかし。この御時よりぞ執柄の權おさへられて、君みづから政をしらせ給ふことにかへり侍りにし。

五 (140)

一ノ部分ヲ解釋セヨ(二)モ同シ

「大正八
京師
專」
徒然草
兼好法
師

一 身死して財のこることは智者のせざることなり。よからぬものたくはへおきたるもつたなく、よきものは心をとどめけんとはかなし。こちたく多かるまして口をし我こそえめなどいふものどもありて、あとに争ひたるさまあし。後は誰にとこころ

よすものあらば、いけらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらんものこそあらめ、その外は何もたぞあらまほしき。

二 すべて春は雨こそどかなれ。軒ばより霞みわたりにいとこまやかにふれるが、衣うるほせどもふるとは見えす、軒の玉水も間遠に音してすみ捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおものかれふの底にみどりややそひ行くも、柳のいと動きもやらで露そふも、ともにいとどかなり。春も老いゆくころ、蛙の時得がほにすたくもをかし。

「同上」
花月草紙
（松平定信）

六(141)

解釋

平宣時朝臣老の後昔がたりに最明寺入道ある宵の間によばるることありしにやがてと申しながら直垂のなくてとかくせしほどにまた使來りて直垂などのさぶらはぬにや夜なればことやうなりともどくとありしかばなえたる垂直うちのままたてまかりたりしにてうしに土器取りそへてもて出でて此の酒をひとりたうべんがさうさうしければ申しつるなり看こそなけれ人はしづまりぬらんさりぬべきものやあるとい

「大正八
東京高
師一
徒然草
（兼好法師）

七(142)

解釋

づくまでもとめ給へどありしかばしそくさしてくまぐまを求めし程に臺所の棚に小土器にみその少しつきたるを見出でてこれぞ求め出でてさぶらふと申ししかば事足りなんとて快く數獻に及んで興にいられ侍りき其の代にはかくこそ侍りしかと申されき。

「大正八
廣島高
師一
神樂歌新
釋
（本居太平）

一 梁塵愚案抄はあるやんごどなき人の物し給へるなりとかやここにその御名あらはさんもたやすきさまなればいはすそのときごといたり深き人はよくわきまふべきことなれど學びあさくては猶いとまどはしきふしもあれどすべては古よりつたへ來りて今の人の及びがたきもありていづれをとりいづれをおくべしども猶えわきまへねば。大かたもらす引きいでたり後の人の考へ合はすべき便どもなりなんかし此の釋に抄曰といへる是れなり。

讀方解釋

「同上」
二 花筏、心にくし、掃部、おふけなし、俚言。

「大正八
東京女高
師」

文中傍線ヲ施シタル字句ヲ抜出シテ、讀方及ビ略解ヲ記シテ、後全文ヲ通釋スベシ(二)モ同ジ

一 元和偃武以前、文學の衰へ、典籍の散佚したること、實に驚くべし。室町の末世
京都は兵馬の巷となり、名器珍什多くはこの時に失はれたり。これを明治維新の際
に、典籍の散佚したる狀況に照合せば、蓋しその情を得るに庶幾からむ。幸にして
思慮周匝なる家康の出づるありて、文學は大いに奨励せられたり。家康の文學を奨
勵せしは、一は幕府創業の際、諸般の法律制度を定むるがための必要に出で、又一
は人心をして和平沈靜ならしめ、殺伐なる武事を忘れて、ひたすら盛代の文化を樂
ましむるための必要に出でたり。その手段として、先づ書籍の蒐集に従事し、これ
を出版印行したり。

「同上」

二 百事の經營、皆一時的にして永久的ならず。この時に際して文章上に一定の理
想を説く、また難からずや。ただ過去二千年間、屢々繰返されたる事例に徴して、
過渡の混亂が如何に統一靜定するに至るべきかを暗示するは、比較的難からず。

「大正八
東京高
商」

傍線ヲ施シタル個所ヲ餘白ニ解釋スベシ

一 松の濤音たてて、おもふ友詣で來れば茶點じてすすめ、我も飲みなどせんは、いと
心ゆくわざにて、文人歌よみなどのもてあそばんいとつきづきしうこそおぼゆれ。
さるを一文宇もしらで、何のみやびたる心もなきをこの、ただこれを大事とかま
へて、立居ふるまひ露ばかりあどに違へじと心にかけて、儀式官のおほやけに仕ふ
るおももちせるに似たるは、いとかたはら痛きわざなり。又調度なども、昔の人は
事そぎて、うるはしからぬ方を好めるは、故なきにあらねど、今は黄金を積みて、
其のあたひを争ふばかりなるを、人毎に挑み合へるはうたてくぞおぼゆる。

解釋(二)モ同ジ

一 人の親の心ばかり、世にもあはれに、くまなく足ひたるものはあらじ。ただち
人並になれる子の、しばしの旅寢をだに、御心にかけて給ひて、さまざまに戒め給ひ
しを、かたじけなしとも思ひたらず、中々に老人のならひとさへに思ひあざみてあ
りしこそ、あさましなどはおろかにて、我ながらいたういぶかしけれ。

「大正八
神戸高
商」

「同上」

二 されば物語(中古ノ物語類ヲ指ス)は物のあはれを見せたるふみぞといふ事をさとりて、それをむねとして見る時は、おのづから教誡になるべき事は、よろづにわたりて、多かるべきを、はじめより教誡の書ぞと心得て見たらむには、中々のものぞこなひぞありぬべき。

「同上」

- 〇 讀方解釋
- 三 復辟、¹⁰的確、¹¹好尚、¹²折衝、¹³譜代大名、¹⁴本地垂跡。

一一(146)

「大正八
長崎高
商」

一 解 釋
それ同化作用を有する藝術に接せんか。人はその刹那において、自我を忘れ、その當時幾何時か、全く現實を超越して、さながら別天地に遊行する感あるべし。

「同上」

- 二 讀方 眞摯、出納、好惡、捺印。
- 三 餘用、理風、濛濛、計營、最良、最良。

「同上」

一一(147)

傍線ノ個所ヲ解釋スベシ

「大正八
山口高
商」
神皇正統
記
房(北島親

一 およそ男夫は稼穡をつとめておのれも食し人に與へても飢ゑざらしめ女子は紡績を事として自らも着人をしても暖ならしむるいやしさに似たれども人倫の大本なり天の時に従ひ地の利によれりこの外商估の利を通ずるもあり工巧のわざを好むもあり仕官に志すもありこれを四民といふ仕官するによりて文武の二道あり坐して以て道を論ずるは文士の道なり征きて功をたつるは武人の業なりされば文武の二はしばらくも棄て給ふべからず世亂れたる時は武を右にし文を左にす國治まれる時は文を右にし武を左にすともいへりかくの如く様々なる道を用ひて民の愁をやすめ各爭なからしめんことを本とすべし民の賦斂をあつくして自の心をほしきままにするは亂世亂國の基なり。

讀方解釋

- 二 家苞、¹⁰上達部、¹¹先覺、¹²三昧、¹³等閑、¹⁴供御、¹⁵造詣、¹⁶教唆、¹⁷敷衍、¹⁸玉の緒。

一三(148)

解釋

「大正八
小構高
商一
増鏡
不詳」

一 御道なかばになりぬれば御送のものども上下都いでしよりも猶花やかに今めかし
うさうぞきかへたり大方はあやしうさまことなる御幸なれど道すがらの御まうけ國
々に心づかひしたる氣色などはかうさまの御ありきとは見えすいとやむごとな
むさはいへど今まで國のあるじにて世をいみじう治めさせ給へりける名残にやあら
むいとねんごろにのみつかうまつれり。

普通文章體ニテ解釋シタル後我が國體ノ精華ヲ述ベヨ、書法ヲ含ム

二 きみかよはちよにやちよにさされいしのはとなりてこけのむすまて

一四(149)

解釋(二)モ同ジ

「大正八
米澤高
工一
徒然草
兼好法
師」

一 主ある家にはすすろなる人心のままに入りくることなし主人なき所には道ゆく人
みだりに立ち入り狐鼻やうのものも人氣にせかれねば所得顔に入り棲む又鏡には色
形なき故によろづの影きたりてうつる鏡に色形あらましかばうつらざらまし虚空よ

「同上」

く物を容るわれ等が心に念々のほしきままにきたり浮ぶも心といふものの無きにや
あらむ心に主あらましかば胸のうちにそこばくの事は入り來らざらまし。

二 先生の風采は堂々の裡に和粹を含み其の舉動は安詳にして恭敬を寓す色温にして
氣清く動容周旋一として規矩に當らざるはなし若し瀟洒磊落に於て缺くる所ありと
するも眞愛篤誠は之を補うて餘あり若し豪邁有爲に於て足らざる所ありとするも忠
懇寛和は之を充して剩す所多し加ふるに心裡光明情理兼ね備り何人も一見信賴の念
を禁する能はず。

一五(150)

解釋(二)モ同ジ

「大正八
東北帝大
工一
増鏡
不詳」

一 この所は人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山かげにかた
そへて、大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など
けしきばかりにてことそぎたり。

二 善惡の報影響の如し。おのれが欲をすて、人を利するを先として、境境に對する
こと鏡の物を照すが如く、明々として迷はざらむをまことの正道といふべきにや。

「同上」 三 倏忽、無聊、信仰、杜撰。

一六 (151)

解釋

「大正八
桐生染
織一
徒然草
兼好法
師」

一 花はさかりに月は隈なきをのみ見るものは雨に向ひて月を戀ひたれこめて春のゆくへ知らぬもなほあはれに情ふかし咲きぬべきほどの梢散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ歌の詞書にも花見にまかりけるにはやく散り過ぎにければともさはる事ありてまからでなとも書けるは花を見てといへるに劣れる事かは。

解釋及ビ縦線ヲ附セル文字ノ讀方

「同上」

二 嘗てロシヤモスコヴァのトレチャコフ美術館に立ちてヴェレスチャギンの名畫を見た事がある一は唯幾千萬の髑髏の丘髑髏のピラミッドを描けるもの夕闇の空雲低く垂れて淋しき空に晚鴉舞ひ人をして自ら悽愴荒涼の思に堪へざらしむるものがある一は大戦の後大雨沛然として篠突く夜幾百幾千の屍を淺く埋めし荒野に燈提げし弔ひ僧の孤影蕭然頭うなだれて戦死者のなきがらを弔ふ態である形ばかりに埋めし

屍のおどろなる髮蒼白き死顔訴ふるに所なき如く新に盛りし土の中より覗き出してゐる暗く冷く重き死の闇は一切の光と生の力を掻き消さずしては止まじとやうにそぼふる雨と共に觀る人の心を壓して止みぬ。

一七 (152)

解釋

「大正八
北海道
大農一
徒然草
兼好法
師」

一 菊の花の盛り久しきも、朝顔の夕かげまたぬも、おくれ先つしばしの程の事にて枯れ行くをしさは同じきが如く、命長かりし人とても、さらぬ別のおろかならんやは。

傍線ノ箇所ヲ解釋スベシ

「同上」

二 先帝踐祚の初、寶算僅に十六、而も英武剛邁、既にして輔弼の良臣啓沃して、以て渾厚裕和の聖徳を進め奉るや嚴霜烈日の威容更に寛仁大度の徳量を具へさせ給へり。されば、若し夫れ事の奏すべきに當りて、たどひ逆鱗に觸るども、至誠を以て直言極諫し奉る者あらむか、帝の聖明なる、恰も驟雨一過の後光風霽月を見るが如

くなりき。

一八 (153)

解釋(二)モ同シ

「大正八
京都
都賀
絲」

「同上」

一 世の人相逢ふときしばらくもだしする事なしかならず詞ありそのことを聞くに多くはむやくの談なり世間のふせつ人のせひ自他のためにしつ多くとく少しこれを語る時に互の心にむやくの事なりといふことを知らず。

二(ア)むくつけし、(イ)あげつらひ、(ウ)揣摩、(エ)校合、(オ)白眉。

一九 (154)

解釋

「大正八
陸士」

一 人の言ふことを強ちにもどかんとてまれくに見えたる一つ二つのためしを固くとらへて世に普く多かる方をひたふるに押しけたんとかまふるはいとかたくなしきわざなり何事も一樣にはあらぬものなればこころの中に一つ二つの異なるためしもなごかなからん只なべて多かる方をもて物は定むることぞかしされば黄牛もあれど牛は黒きものに言はぬかは。

傍線ヲ施セル語ノ意義

「同上」

二 上つ代の詔はいかにみやびたる文なりけんいどゆかしきをそは大方消えうせて近きみ代のこちたきからざまのばかり多く傳りぬるはうれたきわざになむありける。

讀ミ方

「同上」

三 敢果なし、勿體なし、如才なし、冠木門、流鏑馬、不埒者。

二〇 (155)

傍線アル部分ノ讀方意義

「大正八
海兵」

一 生涯不遇にして世を過すものあれば、誹り嘲りて、彼が分際にては、かくこそあらめなどいふは非なり。萬鳥の春に啼き、蟋蟀の秋に吟くは、時を得たればなり。高きに上りて旗を立つれば、いづ方よりも見え、風に順ひて鐸を振れば、遠く聞ゆるなり。千鈞の重きも船に載すれば浮び、鎗録の軽きも船を失へば沈むが如く、人の一時の用捨によりて、青雲にも登り深淵にも沈むなり。

解釋

「同上」

二(イ)猛き武士道のおこりを尋ねれば、いにしへ田村・利仁などいひけむ將軍どもの

増鏡
(不詳)

一一六

事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで、源平の二流ぞ、時により折にしたがひて、大やけの御まもりとはなりにける。

彼は性清淡寡慾、溫柔敦厚、快活にして人を愛し、謙和にして物と争はず。しかも世に阿らず、人に求めず、特立獨行、一意其の信ずる所を守りて動かざりき。

田子の浦にうち出でて、ふじの高根を見れば、時わかぬ雪なれども、なべていまだ白妙にはあらず。青うして天によれる姿、繪の山よりもこよなう見ゆ。

二 (156)

意義ヲ詳細ニ解釋セヨ。但シ先ツ重ナル單語ヲ抽出シテ、之ニ解釋ヲ施シ置キ、次ニ文義ヲ解釋スルヲ便ナリトス。(二)モ同ジ

「大正八
東京外
語」

「同上」

一 古人曰く慷慨死に就くは易く從容義に處するは難しと大丈夫の死に處することこの態度なかるべからず。

二 名だたる犬吠崎の燈臺は岬角に在りその側より崖を下れば巨石海波の間に磊何として或は人立し或は獸蹲す銅像かと疑はるるばかりなる赤裸裸の漁夫のふたりみた

り岩上に踞して綸を垂れたる亦畫中のものなり。

讀方ナツケヨ

「同上」

- 三 容喙、⁸ 解脱、⁹ 鹽梅、¹⁰ 儉安、¹¹ 蒸籠、¹² 還俗、¹³ 打擲、¹⁴ 闖入、¹⁵ 靚面、¹⁶
- 葛籠、¹⁷

三 (157)

解釋(二)(三)モ同ジ

「大正八
神宮皇
學」
花月草紙
(松平定
信)

「同上」
徒然草
(兼好法
師)

「同上」

一 よつの時の移り行くけしきこそまたなくをかしきを咲かざるをりの花をさかせんとし散るころに散らさじと思ふはいと苦しければ又こん年はさきぬべしいかに心をくるしむとも霜白く氷堅きをりにはちすの咲くべきことわりなしされど咲くを待ち散るをしむは道なり散るをもよそにして心とせぬは道しらぬ心なるべし。

二 道々のものの上手のいみじきことなどがたくななる人のその道知らぬはそぞろに神の如くにいへども道知れる人は更に信も起さず音に聞くと見る時とは何ごともかはるものなり。

- 三 賤山がつ、⁵ 科學、⁶ 縣居の翁、⁷ 森閑、⁸ 言語同斷、⁹ 主上、¹⁰ 夕ばえ、¹¹

一一七

三 (158)

解釋(二)モ同ジ

「大正八
專門檢
定」

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は宇宙の現象を總合して之を其の根抵の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。

第九課

一 (159)

左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正九
各高等
三輪物語
山(熊澤蕃
秋成遺文
同上)成
上田秋

「同上」

- 一 身に過ある人のおのれと咎を知るものは心の鬼にさいなまれて年月たしなみもてゆくほどに悪しき習は跡なく消え失せ心ばせもよくなるものなり。
- 二 梶枕⁴わびしくおぼさばかしこによせむかの野にやどりしたまへと申す風波はげしからねばただこのままにとて苦の下臥⁶して明かしにけり。
- 三 (イ) ひねもすよすがら、(ロ) をさく劣らず、(ハ) 回向。

左ノ語句ヲ解釋セヨ

(二) なかくにわろかるべし。

二 (160)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正九
慶應醫
大」
「同上」
徒然草
兼好法
師(同上)
吉田松陰
(徳富蘇
峰)

- 一 芭蕉はもと一俳人に過ぎずされど人となり高潔にしてその後進の誘掖啓發に努むるや誠心懇到切々として至らざる所なかりき。
- 二 道を學ぶならば善に伐らずともがらに争ふべからずといふことを知るべきなり大なる職をも辭し利をもすつるは只學問の力なり。
- 三 松蔭踏海の策敗れて下田の獄に繋がるるや獄卒に説くに自國を尊び外國を卑み綱常を重んじ彝倫を叙すべきを以てし狼の目より涙を流さしめたり。

三 (161)

左ノ文を現代ノ口語ニテ解釋セヨ

白樂天、或年暮煙霞の興にひかれて、あくがれ出でたりけるに、花おもしろき家ありけるに、馬に乗りながら入りけるを、あるじの將軍咎めければ「遙見人家花便入不論貴賤親疎」と詠じけるによりて、又いふことなかりけり。

「大正九
大阪醫
大」

四 (162)

次ノ各文ノ意義を口語ニテ書ケ

「大正九
京城醫
專」

一 思を陳ぶる何ぞ必ずしも三寸の舌のみならんや。情を叙づる、何ぞ唯一枝の筆のみならんや、總べて眼に閃き、顔に映じ、手に動き、體に發する物、皆是吾が深微なる幽懷を述ぶる一の文章と謂はざるべからず。

「同上」
徒然草
兼好法
師

二 狂人のまねとて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし。

次ノ語句ニ讀方ノ假名ヲ附シ、其ノ意義を口語ニテ書ケ

「同上」

三 (イ) 具體的、(ロ) 楮表に溢る、(ハ) 不恰好、(ニ) 所詮、(ホ) 覺束なし。

五 (163)

左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正九
愛知醫
大」
秋成道文

一 一つのいとまにかなき人のかきおきしものをもものの中よりさぐり出でたるかなしさよやりすてんは忘れんとする一つの心なりしかすとも豈忘れんやば。

「上田成
秋」

二 (イ) 都のてぶり、(ロ) かしまたち、(ハ) しはぶき、(ニ) 際物、

六 (164)

解釋

要するに業平の歌は眞率にして虚飾なく直下に人情を傾倒して餘蘊なしかくして彼は平安朝最初の第一の歌人にしてまたこの朝を盡しての第一等の歌人なり唯この朝の末にありてよくその墨を摩し時に一頭地を抜きさへもせしもの西行法師あり西行は自然の懷に隠れ業平は人生の波に漂ふ西行は出でて天地の間に放浪せしに業平は人生を内觀して性情の波瀾を詩化せり。

「大正九
廣島高
師」
國文學全
史(藤岡
作太郎)

七 (165)

左ノ文ヲ口語ニテ解釋セヨ

「大正九
陸士」

一 (1) 今年は春より雨のうるほひ心もどなく苗代へせき入るる水さへかれがれにて蛙の聲もまどほになりゆくままに夏になりては早苗とる田子どもすべなくまどひてうち佗びつつ五月はさりとるとせめて待たるる五月雨さへなほつれなかりけ

ればおほやけにも民の歎を御心苦しうおぼしやらせ給ひ雨の祈つかうまつらせ給ふ

左ノ文ニ讀方ヲツケヨ

「同上」

- 二 (1) 凡そ葛藤なければ開展なし辯難攻撃は學を進むる所以なり學に忠なる者には自ら執着あり執着ある者には自ら論戰あり是に於いてか學界始めて活氣を呈し是に於てか眞理始めて現る沈靜を喜ぶ者は即ち進歩を咀ふ者なり。

左ノ語ヲ解釋セヨ

- (イ) 批准、(ロ) 妥協、(ハ) 時代錯誤、(ニ) 能率増進、(ホ) 積極的方針。

八(166)

左ノ語句ノ意義ヲ書ケ

「大正九
各海軍」

- 一 (イ) 心にくし、(ロ) 家づと、(ハ) けはひ、(ニ) たたずまひ、(ホ) はしたなし、(ヘ) えもいはず。

左ノ文ヲ解釋セヨ

「同上」

- 二 吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に、又よきかむがへのいできた

玉勝間
(本居宣
長)

むには、かならずわが説にななづみそ。わがあしき故をいひて、よきかむがへを廣めよ。すべておのが人ををしふるは、道を明かにせむとてなれば、かにもかくにも道をあきらかにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、いたづらに吾をたふとまむは、わが心にあらざるぞかし。

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

「同上」
方丈記
(明鴨長)

- 三 (イ) 御門よりはじめ奉りて、大臣・公卿悉く攝津國難波の京に移りたまひぬ。世に仕ふる程の人、誰か一人故郷に残り居らむ。官位に思をかけ、主君の蔭をたのみほどの人は、

(ロ) 混亂は融化の基である、統一の來る前にはまづ紛糾の時を経ねばならぬ。今後

のわが國の方針は、古今東西の文化を陶冶して、これを一丸に鑄出するにある。はじめは雜駁の嫌もあるが、これは事物變遷の過程において已むを得ない事である。この混亂の時代を過ぎて、遂には立派な結果を收めるであらう。既に上古は日本も支那朝鮮諸國の文物を輸入し、遂にこれを凌駕して、東洋に第一位を占めるに至つた。過去の歴史は將來の擔保である。

- 四 (イ) 輪奐の美、(ロ) 畫龍點睛、(ハ) 等閑に附す、(ニ) 這般の消息、
 (ホ) 世故に長ず、(ヘ) 後塵を拜す。

九 (167)

左ノ文中傍線ヲ施セル部分ノミヲ解釋スベシ

- 一 振分髪1のうなゐ2子が、おとな3しくなりぬといはれ4しなん、やがて老の始5にて、つ6ひに髪7の白8くなりぬるを9しも、つく10とど思11ひくらべて、埋火12のもと13にのみうづ14くまるを、若15き人々16はさ17こそ見18苦しとおも19ふらめ。

「大正九
北海道帝
大農」

左ノ文章ヲ解釋スベシ

- 二 父をた1たへて唱歌を歌2ふのを私3が聞4いた時は、涙5がは6ふり落7ちてやま8なかつた。
 父9の在10天11の靈12もい13かに喜14んだであら15うと、喜16びに堪17へな18かつた。

左ノ語ノ意義ヲ解釋スベシ

- 三 (イ) 水1莖2の跡3、(ロ) ひ4れ5ふ6す、(ハ) う7しろ8め9た10し、(ニ) は11ぐ12く13む、
 (ホ) あ14げ15つ16ら17ふ、

「同上」

一〇 (168)

左記文章中、傍線ヲ引キタル部分ヲ口語文ニテ解釋スベシ

- 一 霧島山1ニ入2リ、數十町登3リテ霧島ノ宮居4ノ前5ニ著6ク。二神垂跡7ノ地8ナレバ、宮居9今10ニ至11リテ殊12ニ美13シク、コノ近國14ニテノ大社15ナリ。

「大正九
鹿兒島高
等農林
西遊記」
南船橋
「同上」

- 二 君ノ志1ハ初2ヨリ生命3ヲ以4テ壯士輩5ニ與6ヘント期7セシニ外8ナラザリシナラン。君ガ人生9ノ毀譽10ヲ度11外12ニ置13キ、天下14後世15ノ議論16ヲ顧17ミザルモノ、故18ナキニアラズ。

左ノ語句ニ假名ヲ附ケ、且其ノ意義ヲ解釋セヨ

- 三 (イ) 力1説2、(ロ) 肉3薄4、(ハ) 馴5致6、(ニ) 豹7變8、(ホ) 消9息10、(ヘ) 徹11底12、(ト) 調13停14、
 (チ) 先15驅16者17。

「同上」

一一 (169)

左ノ文章ヲ詳解セヨ

- 一 石幽1に薜碧2にして幾條3ともなく白絲4を亂5し懸6けたる細瀧7小流8の珊9々10として灑11げる
 は嶺上12の調13もさだめて此14の絃15よりやと見捨16てがたし。

左ノ語ニ振假名ヲ附シ且解釋セヨ

「大正九
東北帝大
工一
金色夜叉
尾崎紅
葉」

「同上」

二 ① 餘裕綽々、② 風餐雨虐、③ 闕然靜寂、④ 夙夜淬礪。

一二六

二三 (170)

左ノ文中傍線ヲ施セル文字ニ假名ヲ附シ且全文ヲ解釋セヨ

「大正九
米澤高
工」

1 歳華は人を待たず白駒の隙を過ぐるとは電よりも疾し遙なりと思へる將來は忽焉
として諸君の眼前に迫り來らん毫釐も油断せばその理想ははまだ萬分の一も成就せ
ざるにわが耳己に蟬鳴を聞きわが鬢己に霜色を現する悔あらん「明日ありと思ふ心
の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものは。」大なる理想を實にせんの大志あるものは常に今
日を限なりとする覺悟なかるべからず諸君よ明日ありと思ふなかれ。

二三 (171)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正九
桐生高
工」

一 わかき時よしとすること老いて後思へばひがごと多し義理の精明なることは年わ
かく氣あられければなし得がたし老いての後のことなりわかき時はただおほく讀んで
そらんじおぼゆることをつとむべし年老い氣おどろへてはなりがたし。

「同上」
二 友の千里の外にある者遙に羈情を寄せていへらく故國とはくして人の知るなしこ

の孤獨を如何とわれ答へていへらくああ友よ漫に孤獨を言ふを已めよその鼓動を共
にする胸はこの世に幾ばくもあらずかし面して笑ふもの百萬人ありとてわれに於て
瓦礫にひとしからむ。

一四 (172)

左ノ文中、傍線ヲ施シタル箇所ヲ餘白ニ解釋セヨ

「大正九
東京商
徒然草
(兼好法
師)」

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、あはれわが道ならましかば、か
くよそに見侍らしものをといひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく
おぼゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえは、あなうらやまし、などか習はざ
りけむといひてありなん。
わが智をとりいでて、人に争ふは、角あるものの角をかたふけ、牙あるものの牙を
かみ出すたぐひなり。人としては、善にはこらす、ものと争はざるを徳とす。他に
まさる事のあるは大なる失なり。品の高さにも才藝のすぐれたるにても、先祖の
ほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひことばに出でてこそいはねども
内心にそこばくのどがあり。慎みてこれを忘るべし。そこにも見え、人にもいひけ

一二七

たれ、わざはひを招くは、ただこの慢心なり。

一五 (173)

次ノ文ヲ解釋セヨ

一 かくて京へ行くに島坂にて人あるじしたり必ずしもあるまじきわざなり立ちてゆきし時よりはくる時ぞ。人はどかくありけるこれにもそれにもかへりごとす。

「大正九
大坂高
商」
「紀實之
士佐日記
一同上」

次ノ語句ノ右傍ニ假名ヲ附ケテ解釋セヨ

(1) (イ) 便蒙、(ロ) 揣摩臆測、(ハ) 諮詢、(ニ) 寒暄。

次ノ語句ニ漢字ヲ充テテ解釋セヨ

(2) (イ) あいさつ、(ロ) だけふ、(ハ) しにせ、(ニ) そご。

一六 (174)

全文ヲ解釋セヨ

人皆物にあたつて急^せく所出來る事は、氣¹妄動して處を失ふを以て也。妄動する時は知²これがためにかくれて所爲皆妄作也。更に寛³廣の處なし。大丈夫生死一大事の地に臨み、白刃⁴を踏み劍戟をほどばし⁵らしめて剛操の節をあらはし、臨⁶大事決大議

「大正九
神戶高
商」
「山鹿語類
行」
「山鹿素

垂⁶紳正笏、不動⁷聲色、而措⁸天下於泰山之安と云ひける文武の大用は、度量の間に可⁹存也。

一七 (175)

左ノ文ヲ解釋スベシ

一 めづらしといふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものなり、遙なるせかいにある人の、いみじく覺束なく如何ならんと思ふに、文を見れば、只今さし對ひたるやうに覺ゆる、いみじき事なりかし。吾が思ふ事を書きやりつれば、あしこまでも行きつかざらめど、心ゆく心地こそすれ。

左ノ語ニ普通ノ讀假名ヲ附スベシ

二 (甲) (イ) 矛盾、(ロ) 杜撰、(ハ) 村度、(ニ) 穿鑿、(ホ) 蘆斷、

左ノ語ノ誤ヲ訂正スベシ

(乙) (イ) 撰擇、(ロ) 低觸、(ハ) 重複、(ニ) 亂造、(ホ) 慰籍、

一八 (176)

傍線ノ個所ノミヲ摘出シテ解釋セヨ

「大正九
山口高
商牛全集
樗牛全集
公(詩人菅
林次郎)
公(高山)

一 太宰府の配居は公にとりては絶好の詩境なりき外に名利の競争なく内に危殆の憂悶なし公や静に往時を懷慕し現境を思料し咏歎によりて其の哀情を遣るべきなり天は公に授くるに詩人の天分を以てし而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てせり公の政治家たりしや煩惱内に公を苦め讒奸外に公を陥れ遂に公をして無告の流人たらしめき然れども悲い哉此の如くするに非れば公は遂に詩人たる能はざりしなり而も公は死に至るまで此の天分の地に居るを悲み靜かに春秋の榮落を觀じて何時かは昔日の榮華に歸るあらむことを望みたりき此の憂愁と希望との現るる所に公の天分は遂に大成せられたり而して公自らは毫も是を知らざりしなり嗚呼天道冷酷無情何ぞ一に是に至るや。

「同上」
二 左ノ語ノ讀方ト意義トヲ説明スベシ
① 治安、② 合辨、③ 内訌、④ 破綻、⑤ 濫觴、⑥ 妥協、⑦ 批准、
⑧ 肉薄、⑨ 無盡藏、⑩ 高御座。

一九(177)

問題一、二、ハ本文ノ意義ヲ口語體ニテ解釋スベシ

問題三、ハ文中ノ右傍單縦線ヲ施セル部分ヲ摘出シテ其ノ讀方及ビ意義ヲ明記セヨ

「大正九
小樽高
商牛全集
樗牛全集
言(清少納
言)

「同上」
太平記
(不詳)

一 五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もげに只いと青く見えわたるに上はつれなく草生ひ茂りたるを、ながくとただまに行けは、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあげたるいとをかし。
二 主上は重祚の御事相違候はじと、尊氏卿さまへ申されたりし偽の詞を御憑みありて、山門より還幸なりしかども、元來たばかりまゐらせむためなりしかば、花山院の故宮におし籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱さる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を奇て、楓橋の夜の泊に御あはれをそへられ、梢にあまる北山の雪に御簾を撥げては、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。

「同上」
三 天保の末幕政稍衰へ、奸吏横恣に、驕奢風を爲し、府庫空耗す。是に於いて海外の諸夷其の虚を覘ふこと久し。仁人義士腕を搯し、眼を瞋し、奮激慨歎せざるはなし。而も上に在る者恬然として懼るることを知らず、下に在る者熙然として憂と爲さず。一旦眉睫に逼るに迫りて、愕然として措く所を知らず、將に海防の策を求めんとし、劍を鑄、礮を製し、以て豪傑の士を募る、嗚呼亦晩し。曩に事を言ふ者皆

罪を獲て命を殞し、或は光を韜み跡を滅し、或は伴狂して世を追る。裁して其の遺書を索め、以て謀を問はんと欲す。猶圖を按じて騏驥を求むるが如し、焉ぞ其の千里なる者を得んや。

二〇(178)

左ノ文集ヲ解釋セヨ

「大正九
神宮皇
學」
鈴屋集
(本居宣
長)

一 昨日は今日の昔にてはかなくのみすぎに過ぎ行く世の中をつくづくと思へばあはれわが世も幾程ぞや。手を折りて數ふれば早やみそ路にも餘りにけり。命長くて七そちやそち生けらむにてだに。早く半は過ぎぬるよと思へばまだ世ごもれる様なる身も行先程なき心地のみして心細くぞ覺ゆる。

次ノ各語ノ傍ニソノ發音ヲ記セ

「同上」

二 寶頭盧、⁴ 忍辱、⁵ 譯言、⁶ 誅責、⁷ 煩惱、⁸ 利那、⁹ 睥睨、¹⁰ 誅詞、¹¹ 襤褸。¹²

二一(179)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正九
秋田鎮
山」
太平記
(不詳)

朝陽犯さざれども殘星光を奪はるる習なれば必ずしも武家より公家を護にし奉るとしもは無けれども所には地頭強くして領家は弱く國には守護重くして國司は輕し。

二三(180)

左記ノ文章中、縦線ノ部分ノ意義ヲ記セヨ

顧れば吾等の雙肩は重し。印度、支那は曾て文華の盛を極めしもの、先哲の遺烈今壞空に歸せりと雖も、流芳遺韻永く留つて我が國にあり。而して前後五十年、歐米の開化を咀嚼し、其の精髓を吸収したるは亦我が國なり。東西兩洋の二大潮流は扶桑の地に交會せり。彼此を融和して、新に坤輿文明の中心となり、燦たる風化を八紘に光被せしめんこと、是將來における吾等の期待にあらずや。

二三(181)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

一 われはまづもはら萬葉を明めんとする程にすでに年老いて残りの齡今いくばくもあらざれば神の御ふみをとくまでにいたるをえざるをいましは年さかりにて行くさき長ければ今より怠ることなくいそしむ學びなばその志遂ぐるこゝろあるべし。

「大正九
京都高
玉勝間
本居宣
長」

「大正九
明治專
門」

「同上」
平家物語
(不詳)

二 ゆきくれて木の下かげを宿とせば。花や今宵のあるじならまし。

一三四

二四 (182)

左ノ文ニ句讀ヲ切り、濁ルベキハ濁リ、返リ點アルモノハ送り假名返點トナ記シ、句ノ右側ニ一ヲ施シタル所ハ(1)(2)の番號ニ從テ解決シ、△印アル所ハ誰ガトカ誰ヲトカテ明カニ……ヲ施シタル所ハ特ニ注意シテ解説シ、||ヲ施シタル所ハ字義ノミナラズ、其ノ何物ヲ指スカモ説明スベシ

「大正九
水産講
習」

淇園¹爲人曠達不拘客を好みて才不才をいはす²あるひはかりそめに來たるものをも年を経て還さず、或時は³驛路に出て回國あるひは順禮の道者をも引て禮をあつくして留るに⁴鏡をたて供人あまた具したれば刀のためしもの料にあさむかるるならんと心得てにくるもの多かりし。

池大雅の妻町子は玉瀾と號す夫とともに冷泉殿へまねかれて歌を學ぶ始てまゐりし時糊こはき綿衣に魚籠を引提てまゐれり⁴かれより⁵まねき給へる也⁶富たるにもあらねば夫婦ながら假初の禮儀を表しても有べきを世人にまゐりて季節の謝物をとどのへまゐれり。

二五 (183)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

一 心のままに茂れる秋の野には、おきあまる露に埋れて、蟲の音¹がましく、やり水²の音のどやかなり。

二 もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから忘るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。

三 夏になりて、かやぶきの軒ばに、五月雨のしづくいと³ところせきも、御覽じなれぬ御心に、さまかはりておぼさる。

四 しかるを或る夜、野分⁴はしたなう吹いて、紅葉みな吹きちらし、落葉頗る狼藉⁶なり。

二六 (184)

左ノ文ヲ口語體ニテ解釋セヨ

一 人の得たる所を以て得ざる所を信すべからず。一事得たりといへども他事には得ざることあり又得ざる所を以て得たる所を疑ふべからず。一事得ずといへども他事に得たることありわが得たる所を以て人の得ざる所をそしるべからず。是恨をとる道な

一三五

「大正九
國學院大
學」

「大正九
明治大
學」
徒然草
(兼好法
師)
「同上」
方丈記
(鴨長明)
「同上」
増鏡
(不詳)
「同上」

「同上」
玉勝間
（本居宣
長）

二 今様の世の人のもてはやすめる。花どもも世に多かるを。數へいでぬはことさらめき
たるやうなれど歌にも詠みたらず古きものにも見えたることなきは心のなしにやな
つかしからず覺ゆかし。されどそれはたひとやうなる僻心にやあらん。

「同上」
増鏡
（不詳）

三 うき世にはかかれとてこそ生れけめことわりしらぬわが涙かな。

二七 (185)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正九
東京音
樂」
洗心録
（幸田露
伴）

一 秋は夜面白く、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日の月の、ふと見る夕昏の空
に出で居りて、雑木の梢、もろこしの垂葉などに、風かすけく嘯く、先づおもし
ろし。

「同上」

二 古人の詩をつくる、意の言外にあるを尊び、人をして思ひてこれを得しめぬ。故
にこれを言ふものは罪なくして、これを聞くものは以て戒むるに足るなり。

「同上」
神皇正統
記
（北島親
房）

三 人臣としては君を尊び、民を憐み、天にせぐくまり地にぬきあしし、日月の照す
を仰ぎても、心のきたなくして、光にあたらざらん事をおぢ、雨露の施すを見ても

身の正しからずして、恵に漏れんことを顧みるべし。

二八 (186)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正九
専門檢
定」
うけるが
花（小澤
藤庵）

一 八月二十日あまりの秋のけはひのなつかしくて例の隅田川のほとり石濱の庵に行
きて宿りぬ有明の月の匂も霧たちわたる曙のさまもところから世にも似ぬものから
ここは雨のそぼふる日なん殊にあはれ深かりける。

「同上」

二 雪の頃いへばおろかなり、いくへどなき山の梢をかしきほどにつもりてはるく
ど見やられたるに、さすがに松杉のけちめわくべかりけり。

「同上」

三 初め君が此の書の稿を畢ふるや、既に學界耆宿の定評あるに關せず君は猶幾多の改
竄を施さんことを期し暫く之を筐底に藏せり。

第十課

一 (187)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
各高等」
給屋集
（本居宣
長）

一 心なき本草鳥けだもののおなじつらになにすとしもなくあかしくらしつ。ついでける
かぎりのよをつくしていたづらに苔の下にくちはてむ。はいとくちをしくいふがひな
かるべし。

「同上」
徒然草拾
遺
（不詳）

二 鶴こそいとめでたき鳥なれ朝日かがよふみぎはなどに雪のつばさゆるやかにさら
し空とよむかどばかり鳴きあげたるなどすべていふもおろかなり。

「同上」
源平物語
の序
（大町桂
月）

三 平家の一門廟堂に列し六波羅の榮華四時を春にせる時東國草萊の間に潜める源氏
の一族忽ち崛起して之を追ひ落し鎌倉の覇府新に政治の中心となれり其の變轉の激
甚なる其の曲折の多様なる我が國史の繪卷中色彩際立ちて絢爛たるを見る。

二 (188)

左ノ文章ヲ口語ニテ解釋スベシ

「大正十
北海道帝
大農」
徒然草
（兼好法
師）

名を聞くより、やがて面影はおしはからるる心地するを、見るときは、又かねて思
ひつるままの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程
にてぞありげむと覚え、人も今見る人の中に思ひよそへらるるは、誰もかくおぼゆ
るにや。

三 (189)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
陸士」
藩論譜
（新井白
石）

一 豊臣關白殿、いかにもして徳川殿と親しうならんとて、頓てその妹君を徳川殿の
北の方に參らせられしかば、徳川殿、此の上は見參なくては叶ふまじとて御上洛あ
るべきに極る。御家人等が危く思はん所も侍る故、都に御逗留あらん程は、それに
留めさせ給ふべしとて、大政所の母を下し給ひしかば、岡崎の城に入れまゐらせ、
本多重次之を守る。

左ノ歌ヲ解釋セヨ

「同上」
二 何事も、のりを越えゆく世の人の
こころにかたき關守もがな。

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「同上」
三 常識は人間學の骨子なり。人、才學ありて常識なきは、恰も錢の緡なきが如し。
遂には散漫妄誕なるを免れざるなり。才學は幽寂の境之を養ふべし。常識は熱鬧の
中之を養はざるべからず。蓋し常識は人と人と相摩擦したる際に養成せらるるもの

なり。

左ノ語ヲ解釋セヨ

四 (1) 設計、(2) 彈効、(3) 誘拐、(4) 抽象的、(5) 過渡時代、

四 (190)

左ノ文中傍線ヲ施セル部分ヲ解釋セヨ

一 五月のつごもり、さ月のついたちなどの比ほひ、橘の濃くあをきに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず、郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず。

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

二 頼朝の平治の亂に敗れて、俘囚と爲れる、寔に眇たる可憐兒 死生唯平氏の掌裡に在り。池禪尼の百方助命に醒めし時、唯其の憫むべきを見しに、死を免れて伊豆に流さるるに及び、人指して虎を野に放つ如しとせり。虎視耽々、幾年の間、果して八州の野皆之に靡く。遂に大に興りて西向嘯呼するや、京畿の山河之が爲め震撼

し、水禽の騒げるさへ、猶平氏の軍を潰散せしむるに至れり。

五 (191)

解釋

今年もはや半過ぎぬればいつしか秋のけしきたちて萩吹く風も身にしむ頃なり久しく翁のが行かねばいざたづね問はんとてある夕暮に人人打ちつれて來しが又まゐらんとて歸らんとせしを翁とどめて今宵は月もよし薄酒すすめ奉らんしひてとまり給へといへば翁の心をいかでそむくべきあらばとて各座をしいて清談の露やうやう繁きほどに家人やがて心得てあるじまうけし肴取り添へて盃出しけり翁曰くは月に對して昔を忍びてはさながら古人の面影もうつるやうに覺ゆいづれの世にか又わが如く月に對して今を忍ぶ人もやあらん月はさこそ其の世を照すらめもしあつらへ告げらるるものならば月にさは一言をも残さましと思ひ侍りといふ。

六 (192)

左ノ文ヲ解釋スベシ

「大正十 明くれば又野中を行くそこに野飼の馬あり草刈るをのこに歎きよれば野夫といへど

「大正十
東京高
師一
駿臺領話
(室鳩巢)

「大正十
海軍各
校「
祝草紙
(清少納言)

廣島高
師「
奥の細道
松尾芭蕉

さすがに情しらぬにはあらずいかがすべ。やされどもこの野は縦横にわかれてうひ
くしき旅人の道ふみたがへんあやしう侍ればこの馬のとどまるところにて返し給
へどてかし侍りぬちひさきものふたり馬のあとしたひて走る。

七 (193)

左ノ文中傍線ヲ施シタル箇所ヲ十分ニ説明セヨ

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、初心の
人ふたつの矢を持つことなけれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。
毎度ただ得失なく、この一矢にさだむべしと思へといふ。僅に二つの矢、師の前に
てひとつをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師こ
れを知る。この誠萬事にわたるべし。道を學する人、ゆふべには朝あらむことを思
ひ、朝にはゆふべあらむことを思ひて、重ねて懇に修せぬことを期せり。況んや一
刹那の中に於いて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞただいまの一念において直
ちにすることの甚だ難き。

八 (194)

左ノ文中傍線ノ箇所ヲ解釋セヨ

一 近き世の人の歌も文も大方はよろしと見ゆるにもなほ僻事おほきぞかしされど
そのたがへるふしを見知れる人は世になければただかいなでにこかしこえんなる
言葉をつかひよしめきて詠みなし書きちらしたるを誠によしと見て人のもてはやし
譽めたつれば心をやりてしたりがほすめるいとかたはらいたくをこがましくさへぞ
思はるる。

二 家國のすがたはわかくとあらまほしもし年老いたるすがたになりもてゆけばも
のごとしづみはてて人にみしられど物のいろめも花やかならざれと思ふまでにな
り行くぞかしその心よりして人に秀でむの心もとよりなければ物の堪能上手もたえ
はてぬるものになむ。

九 (195)

左ノ文中傍線ヲ附シタル箇所ヲ解釋セヨ

祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり沙羅双樹の花の色盛者必衰の理を現す驕れる者
久しからず只春の夜の夢の如し猛き人も終には亡びぬ偏に風の前の塵の如し。

「大正十
大阪醫
大」
玉勝間
本居宣
長

「同上」

「大正十
東京商
大」
平家物語
(不詳)

10 (196)

次ノ文中傍線ノ部分ヲ解釋セヨ

「大正十
大坂高
商一
増鏡
(不詳)

草のみどりのこきうすき色にて、去年のふる雪の遅くとく消えけるほどを推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり、目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くてうせにし、いといとほしくあたらしくなむ。

11 (197)

次ノ文ヲ解釋セヨ (二)ハ傍線ヲ施シタル所ノミ解釋セヨ

「大正十
名古屋高
商一
蘇峰文選
(從富猪
一耶)

一 吾人の周囲を見廻せば、爲すべき事爲さざる可らざる事甚だ多し。然も自ら顧みれば、力微にして才足らず。茫々たる人生、漠々たる乾坤、殆ど手の着くべきなく脚の擧ぐべきなし。吾人自ら憂悶を歓迎せざれども、渠は招かざるの客として、勝手に我を襲ふなり。是に於てか、或者は窮屈なる小我の城に立籠り、或者は世界に吞まれて、自己として自己の立場を失ふ。即ち穴を守るの蟹たらざれば、巢を忘るるの鴉たり。

「同上」
大日本産
業總覽序

二 強兵は富國に俟ち、富國は産業の振興にこれ由る。由來我が國民は弓箭の道に長せりと雖も、經濟の識に乏しきの憾あり。産業の發達遅々として常に歐米列強の後塵を拜せり。惟ふに産業の振興は固より自然の力に俟つこと多しと雖も、地の利は人の和に如かず。努力はよく天與の菲薄を補ふに足る。徒に萎縮退嬰するは大和民族の爲すべき所にあらず。宜しく進取の大策を立てて、華を去り實に就き、勇往邁進すべきのみ。

12 (198)

次ノ文章ノ要旨ヲ五行以内ノ短文ニ約メテ答ヘヨ

「大正十
神戸高
商」

吾人は我が力を恃むと共に、我が正義を恃みとす。此の如くして興國の我を扶くるあらば、興國と共にす可し。苟も興國なくんば、我自ら往く可き道を往かんのみ。吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏る可きものあらば、そは内憂にあり内憂の中、殊に畏るべきは、國民的精神の消磨にあり。知らず、我が國民は、大死一番自ら新生命を贏ち得るの覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者

は死し、死を敢へてする者は生く。國家の前途を解決す可き秘機は、只此の死生の二字中にあり。

一四六

拾

振

一三(199)

傍線ノ個所ノミヲ解釋スベシ

一 二宮先生は博學多才の人にあらずして博學多才の人よりも尙大に世を益せし人なりと云ふべく。先生は亦悟道得眞の人にあらずして悟道得眞の人よりも尙高く世に秀でたる人なりといふべし。其の初を考ふるに貧賤に身を鍊り寒苦に心を鍛へ學問を實際より離さずして遂に道に明かに行に敏き君子となられしなり。それ聞くと思ふと修むるとは學を成し徳に入るの道なるに聞いて思はざるが故に凡人となり思うて修めざるが故に君子となる能はず然るに先生は聞思修の三を能くせられたるが故に聞くこと少きも思ふこと多く思ふこと少きも修むること多く修むること多かりしが故に得ること極めて多く遂に萬人を動すの人となりたまひしなり。

左ノ語ノ讀方ト意義トヲ説明セヨ

- 同上
- 二(イ)會釋、(ロ)模倣、(ハ)執着、(ニ)劈頭、(ホ)物具、(ヘ)超越、(ト)洒落

- (チ)拾收、(リ)荒唐、(ヌ)暗中飛躍、

一四(200)

左ノ意義ヲ解釋スベシ

おのれは、都に久しく住みて、見侍るに、人の心おどれりとは思ひ侍らす。なべて心やはらかに情あるゆえに、人のいふ程のこと、けやけくないなみがたく、萬えいひはなたず、心よわくことうけしつ。僞せむとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづからほいとほらぬこと多かるべし。東人は心の色もなく情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめよりいなといひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるるぞかし。

一五(201)

左ノ文ヲ解釋セヨ

膽をねるといふはいかにして得てんとたづねしに天命を知るにあり此の知るはまこと知るをいふなり只こがねなどの欲は去りやすし好名の欲ぞいとかなしき古にも父君の命に背きて身を潔くし朝廷の事をそしりて直をうるこれをしのぶならば何か

一四七

「大正十
山口高
商」

「大正十
小樽高
商」

「大正十
米澤高
工」

しのび得ざらんとまで古よりいひしを。只その天命をまことにしりて疑ふことなれば。つゆも心の煩なくちりばかりもけがれなし。獨寝ふすまにはちすとかいふかの浩浩たる氣ともいふらん。

一六 (202)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
桐生高
工」
花川双紙

一 雪のいとたかくふりつみたる夕ぐれよりはしちかうおなじ心なる人二三人ばかり火をけなかにすゑて物がたりなどする程にくらうなりぬれば。こなたには火もともさぬに大かた雪の光いとしろう見えたるに。火ばししてはいなどかきすさびてあはれなるもをかしきもいひあはするこそをかしけれ。

二 そもかかるめめしくをぢなき心をとくしう書いつけおかむ。は人わらはれなるわざにてはちがましきかぎりなれどこの頃の筆硯の苦人情の苦窮措大が囊中の苦さへ湊合しつることなれば。後にこの書を見むごとにおのれひとりか思ひやりにせむとてなり讀む人はあはれとも見ゆるしたまへや。

一七 (203)

左ノ國文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
明治專
門」
徒然草
兼好法師

1 名利につかはれてしづかなる暇なく一生を苦むることおろかなれ財おほければ。身をまもるにまどし害を買ひ煩を招くなかぢなり。身の後には金をして北斗を支ふとも人のためにぞわづらはるべき。愚なる人の目をよるこぼしむるたのしびまたあぢきなし。大なる車肥えたる馬金玉のかざりも心あらん人はうたて愚かなりとぞ見るべき。金は山にすて玉は淵になくべし。利にまどふはずぐれて愚かなる人なり。

一八 (204)

左ノ△印ノ左側ニ讀假名ヲ附ケテノ部分ヲ解釋セヨ

道益世々醫を業とす、近村へ醫療に行く路の程、農人の早苗¹を運び植うるにあふ、世のならはしに、苗うるときは、行人勞を慰して過ぐるを、此の老翁²もせねば、農夫等つふやきて、彼八幡の道益禮なしと誦³る、老人これを聞きながら行き過ぎて歸るさに、又ここを經る時、田にある人をこてまねきす、さすがに⁴しる人なれば田を出でて來るに、曰はく、さきにわれをそしれり、子よく思ふべし、子が苗ううるも業なり、吾が醫療に通ふも業なり、われもし子を愚勞せば子もまた吾をしかすべ

「大正十
水産講
習」

「大正十
東京外
語」

し、いかにど、農人え答へず、又或家の請に應じて、病人を疹て速に去らんとす、あるじ薬をこひしかば、曰はく、既に門を出で數百歩行きたる客のために響をまうくるが如し、及ぶべからずと、終に出で去る、これにて常の趣知るべし。

一九 (205)

左ノ文句ヲ詳解セヨ

一 言ふ所に非ずんば言ふこと勿くして以てその患を避けよ爲す所に非ずんば爲すこと勿くして以てその危を避けよ明君は冥冥に見て未形に謀り聰者は無聲に聽き慮者は未成に戒む。

左ノ文句ヲ詳細ニ解釋セヨ、上下ノ語句ノ關係ヲ明解セヨ

二 折々に心なけれど訪ふものは賤がつま木の斧梢のあらし猿の聲これらが音づれならでは正木のかづら青つづらくる人まれになりはてて濡れのみまさる袂かな。

二〇 (206)

左ノ文ヲ口語ニテ大意ヲ説明セヨ

一 神儒佛の教さまゝなる中に、上はかしこき朝政より、下は十露盤の忙しき世渡

早稲田高
等學院」

り市の出賣の其の日過ぎまで、朝寝せよとの教こそなけれ、まして鶏の始めて鳴きてより、忠臣に蚊にせせられて、煙草に明け行く鐘を數ふとかや。

左ノ文ヲ解釋セヨ

二 あらゆる藝術の士の煩惱を解脱する點に於て清淨界に出入し得る點に於て我利我欲の羈絆を掃蕩し得る點に於て千金の子よりも萬乗の君よりもあらゆる俗界寵兒よりも幸福である。

二一 (207)

左ノ語ヲ解釋セヨ

一 (イ) 心にくし、(ロ) 後めたし、(ハ) あげつらふ、(ニ) うつつなし、
(ホ) 浮世のさが、

左ノ文ヲ解釋セヨ

二 其の道のはと三十里が間には絶えて人里もなかりければ或は高峰の雲に枕を歌てて苔の筵に袖を敷き或は岩漏る水に渴を忍んで朽ちたる橋に肝を消す山路もどより雨なくして空翠常に衣を濕す見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り見下せば千丈の碧潭藍

「同上」
「太平記」
(不詳)

「大正十
高校入學
者檢定」

に染めり。

二二(208)

左ノ語句ヲ解キ且ツ漢字ニハ讀方ヲモ記セ

「大正十
定」専門檢

「同上」
琴後集
村田春
海

「同上」
増鏡
(不詳)

一 仁澤¹遐²陬³に露⁴洽⁵す、
 二 玉梓⁶の便⁷を待⁸つ、
 三 滄⁹檠¹⁰、
 四 なり¹¹はひをいそしむ

二 古も今も高⁵きもみじかきも月と花とをなつかしく思へることひとしければ。今そのよしあしをことわりいはむは人⁷わらへにもなりぬべ⁸けれどおのがじし見る人の身にたぐへおもはむにはそのよるかたいかでかなくてやは。

三 六波羅より武士どもまゐりかこみしかば。師賢卿は都にまざれおはすとて夜ふかく志賀の浦をすぎ給ふに。有明の月くまなくすみわたりによせかへる波の音もさびしきに松吹く風の身にしみたるさへどりあつめ心ぼそしと思ふことなくてぞ。見ましほのくど有明の月の志賀の浦波とよまれけりその後辛うじて笠置にぞ。たどりまゐられける。

第十一課

一(209)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

一 をさまれる世はうまやぢの行きかひにぎははしく人²やどす家もたちつづきて何の事かくふしもなきものからさすがにうちとけてしもねられぬは旅ぢのならひなるべし。

二 假令³活動⁴向上⁵が何等の較⁶著⁷なる効果⁸を産⁹せずとも假令¹⁰落¹¹々¹²たる雄心¹³浩¹⁴心¹⁵を抱いて空しく逢¹⁶蒿¹⁷の中に埋¹⁸了¹⁹するが如きことありとも誰か目²⁰して全く失敗²¹せりといはんや之を失敗²²せりとするはこれ畢竟²³己²⁴が狹²⁵陋²⁶なる功²⁷利²⁸的²⁹打³⁰算³¹的³²の眼³³を以³⁴てのみ成功³⁵の意義³⁶を解³⁷すればなり。

二(210)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

一 おもはぬ病¹にいどけ²なきまなごう³しなひし親⁴のかなしみに胸⁵せまりてよくもあし

「大正十
等」各高
檀園文集
(中島廣
足)

「同上」
病問錄
(綱島梁
川)

「大正十

一北海道
帝大農

くも咲きいでたる花の手折らるるはさてありぬべし。かたき蕾の人の目にどまるとも
なくてにはかの嵐にもぎとられしうらみはいかばかりぞ。どかこてるげにことわりに
こそとおぼえぬ。

「同上」

二 優劣の論議は一己の好悪を擴大してこれを出来るだけ普遍的ならしめんとする努
力である自己の好悪を直接他に感染せしめる道なきが故に已むを得ず一先づこれを
客觀的に翻譯してそれを納得する他人に自己同様の好悪を把握せしめんとする方便
である。

「同上」

三 むくつけきふくべもひさごといへば伏猪のやさしみあり花はまして夕がほの人め
きて装へるをこのものへつらはずうき世をへちまど名のりける歌よみも名にもて
あつかひてこちらの料理にはつかはれずとてはからかし捨てたるをやがて俳諧師のひ
ろひとりておのが垣根には這はせたるなり。

三 (211)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十 一 乙若生年十三なるが弟等を誠めて言ふやうあな心憂の者どものいひがひなさや我

一陸士
保元物語
(不詳)

等が家に生るる者は幼けれども心は猛しとこそ申すにかく不覺なることを宜ふもの
かな。世の理をも辨へ身の行末をも思ひ給はて七十になり給ふ父の病氣に依つて出家
遁世して憑みて來り給ふをだに斬る程の不當人のましてわれくを助け給ふとあら
じ。あはれはかなきことし給ふ頭殿かな。

「同上」

二 我等は内省して自己分内に生命の流れの脈々として發動しつつある所以を覺知し
身は現象界と共に念々流轉しつつも心は卓然として靈界の氣を呼吸しここに人格の
根抵を据えて翻つて現象界の境遇を制し行かざるべからず。

「同上」

三 (1) 絶對的、(2) 相對的、(3) 淘汰、(4) 薰陶、(5) 喝破、(6) 道破、
(7) 枕藉、(8) 狼藉、(9) 管見、(10) 達見、

四 (212)

左ノ語句ノ意義ヲ問フ

一 (イ) なまじひ、(ロ) さりげなし、(ハ) いひしろふ、(ニ) うしろめたし、
(ホ) 内侍所、(ヘ) 竹の園生、

「大正十
軍」
各海

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

「同上」
神皇正統
記
房北島親

二 朝夕に、長田、狹田の稻のたねをくふも皇恩なり。晝夜・生井、榮井の水のながれを飲むも神徳なり。これを思ひも入れずあるにまかせて欲をほしきままにし、私をさきとして、公を忘るる心あるならば世に久しき理侍らじ。いはむや國柄を執る仁にあたり、兵權をあづかる人として正路を踏まざらんにおきては、いかでかその運を全くすべし。泰時が昔をおもふには、よく誠ある所ありけむかし。子孫はさほどの心あらしなれど、堅くしける法のままに行ひければ、及ばずながら世も重ねしにこそ。

左ノ文ヲ解釋セヨ

「同上」

三 支那四千年の歴史上最も活氣あるは周末の社會なり。蓋し一方に於て名將勇士が矢石の間に勝敗を賭すると同時に、一方に於ても文人學者は口舌の間に優劣を争ひ文筆の上に雌雄を定めんとするの風ありき。故に人後に立たん事を恐れて、放言高論、一機幟を樹て、天下の耳目を聳動せんとするは、當時學者の常態なりき。即ち蘇秦の所謂寧ろ鶏口と爲るも牛後と爲る勿れの一語は、ただに六國人主の意嚮に的

中したるのみならずして、また能く當時の人情を穿ち學者の心腸を看破せるものならずや。

五 (213)

解 釋

明治二十年代は純文學勃興の新時代なり、十八年に出でし坪内逍遙の書生氣質(名書)固より作風廻轉の樞軸なりしかど、作そのものに大なる價值あるにあらず、ついで同じ人の妹脊鏡(名書)あり、このたびは人情世態の表裏を發いてやや細に入り、靴一重は脱がれたれども、なほ直ちに痒きを搔く心地はせざりしに、氣凝るところ、霧と布き霞と棚引かすんば止まず、ここに至りて一篇の傑作浮雲(名書)は衆人翹望の對象として現はれたり。浮雲の作者を長谷川二葉亭とす、其の文章は對話のみならず地の文をもすべて口語體を以て行き、寧ろ平凡なるが如き家庭の波瀾を捉へて、心ゆく程の描寫を試む。洵に當代小説の逸品なり。

六 (214)

「大正十
一東京高
師」

解釋

「大正十
師」
廣島商

一 みよしのの吉野の奥に旅寝して世に似ぬ秋の月を見るかな。
光は宵の間にて入りかたとおぼしきより、雨しきりなり。今宵も憂くわび泣きして
明しぬ。七日の行ひ、あしたより雲の名残なくて人々よろこぶ。まろうど來れり。
奥山住の里人といふ。老いたる人の頭に黒き巾をかうぶりて、あやし、額に角ある
かたちを作りなし、身には駕輿丁の著るべき麻衣をふし染にして僧俗のけぢめ知ら
れぬ出立したり。

次ノ文章ハナルベク平易ニ解釋スベシ

「同上」

二 我が大和民族たるものは、世界公論の容す所に據り、天下の大道を行ひ、國際共
通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。與國の有無は敢て我等の考へざる所、
外患、亦、此を恐れず、寧ろ眞に畏る可きものあらば内憂のみ。内憂の中、殊に畏
る可きは國民的志趣の消磨にあり。知らず、我が國民は大死一番、以て新生命を贏
ち得るの覺悟ある乎。活裡死あり。死中活あり。國家の前途を解決すべき秘機は只
此の生死の二字中にあり。

七(215)

左ノ文ヲ解釋セヨ

もとよりいやしき身にて一代の風教を維持せむとすとも我が及ぶべきにあらねばひ
とへに虻の樹を撼かし精衛が海を填むるに似たるべし。さはいへど世を憂へ民を新
にするもわが儒分内のことなれば之を度外に置くべきにあらす世に老師宿儒と稱す
る人の好んで異説をほしいままにし又は他道を雜へて仁義五常の沙汰をばよそにす
るこそうけられね。ただつとめて新奇を競ひて俗耳を悦ばしめ時好に投するなるべし。
いと口惜しきことなり古人の所謂阿世曲學とは是等をいふなるべし。

八(216)

傍線ヲ施シタル部分ハ特ニ抽出シテ解釋シ、更ニ本文ノ大要ヲ簡明ニ記載スベシ

古來戦争の後には必ず精神的覺醒が來る何れの文學でも大敘事詩は戦争の物語であ
るが單に戰鬥を叙するだけでなく戦争に於ける生死の争命懸の巷に出入する人の心
持且は又戰亂の爲に恐慌を來し悲惨の目に逢ひ人生の艱難を痛切に經驗する人の心
持其のうへ又戦争のすんだ後の人心の覺醒信仰の要求これ等が人生の現在現實以上

「大正十
大」
大阪醫
驗雜話
(穿鳩集)

「大正十
高」
東京女
師

に渉る永遠の意味に觸れて沈痛深遠な精神的動搖が起るこれ等の覺醒動搖が何かの思想を信仰として叙事詩の背景となつて現れる而してその叙事詩を歌ふ者もこれを聽く者も共に同じ精神の強風に卷込まれて深遠なる風化を得るこれが大戦争の文學に残した印象であるのみならず戦争後に來るべき精神的覺醒の記念である平家物語の如く大戦に際しての精神的動搖は其の國の文學に其の記録を留めて居るそれ故かくの如き文學は單に詩想や空想の産物でなく血と涙との跡である筆や口で綴つただけでなく命懸の大事の記録である。

九(217)

左ノ語句ニ讀方ノ假名ヲ付ケヨ

「大正十
一東京高
商大豫」
「洗心録
件」幸田露
「同上」
古今集

- 一 (甲) 禍福は糾へる繩。
 - (乙) 雲の扉裂けて金光迸り騰り紅盤焰旋りて瑤瑤爛るるが如き太陽。
- 左ノ語句ヲ解釋セヨ(但シ解釋記述ノ文ニハ句讀ヲ施セ)
- 二 (甲) 瀧路の客。
 - (乙) 春霞かすみていにしかりがねの今ぞなくなる秋霧の上に。

方丈記
(鴨長明)

(丙) 逝く川の流は絶えずしてしかも水にあらず淀みに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまらず(コノ文ハ語句ノ解釋ヲ要セズ、如何ナル旨趣ノコトヲ言ヘルモノナルカヲ記述セヨ)

一〇(218)

次ノ全文ヲ解釋セヨ

「大正十
一神戸高
商」
古今著聞
集(橋成季)

武則、公助といふ隨身父子ありけり。右近の馬場の賭弓わろく仕れりとて、子公助をばはれる所にて打ちけるを、逃げのく事もなく打たれければ、皆人、いかに逃げずしてかくは打たるるぞといひければ、とく逃げ候ひなば、衰老の父追はむとせむほどにたふれなど侍らば、極めて不便なりぬべければ、かくの如く心のゆくほど打たるるなりと申しければ、世の人、いみじき孝子なりといひ、世のおぼえこれよりぞ出で來にける。

一一(219)

左ノ文中傍線ノ箇所ヲ解釋セヨ

夫れ天地は大人物なり山水語らず日月言はずと雖も夫の能く自然を觀る者は其高

「大正十
一山口高
商」

仰ぐべからず其の深俯すべからず。漠然限り無きが如きも而かも渾然として全く茫々意無きが如きも而かも鑿々として味あり星辰の大毫絲の微布置則あり運行度あり雷霆時に怒れども地動かす風雲時に號べども天常に悠然として彼の蒼を仰げば虚しきが如く満てるが如く情時に怫鬱意時に蕩逸或は怡懌虚無なる如く或は縦横卓犖なるが如く氣象萬千意料究まり無し。

「同上」

- 二 (1) 宵野、(2) 臧否、(3) 膾炙、(4) 刹那、(5) 木強、

一一二(220)

左ノ文ヲ解釋スベシ

「大正十
一分高
商」
樞國文集
足(中島廣)

一 岩もる水のほのかなるを竹の樋もて簀子のあたりにひきいれつつあやしき水槽にたたへたるが夜晝となく滴る音のいみじう心すみてうき世の塵も清うすすぎはてぬる心地すおきふし安き獨住には山の鳥どももいたうなれて朝夕にこの水のほとりにおり来つ。羽うちそそぎなごするもまたなき友と思ひむつればてなむ。

左ノ文中傍線アル語句ノ讀方ト意味トヲ記シ且ツ全文ノ大意ヲモ述フベシ

「同上」

二 嗚呼煩惱の羈に繋がれ生死の巷に流轉して我や年久しくも迷ひける哉今や我れ輪廻の鎖を斷絶して解脱の鍵となしぬ生死大海無明の暗夜我れはその照すべき光りを得たり一切人生の苦惱の源は此の光りによりて残りなく看破られぬ我れは自在なり我れは圓滿なり何物かまた我れを囹圄に捕へ得べき一切衆生は我れに縁りて等しく悟りの道に入るを得べし悟りの道とは渝はらざる真理なり動かざる安心なり圓かなる福德なり不生不死寂滅爲樂の涅槃なり。

一一三(221)

左ノ文ノ意義ヲ平易ニ解釋スベシ

「大正十
一小樽高
商」
徒然草
兼好法師

一 何事も入りたぬさましたるぞよき、よき人はしりたる事とてさのみ知りがほにやはいふ、片田舎よりさしいでたる人こそ萬の道に心えたるよしのさしいらへはすれされば世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へる氣色かたくななり。よく辨へたる道にはかならず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけれ。

左ノ文中右傍ニ縦線ヲ施セル語句ヲ摘出シテソノ讀方及ビ意義ヲ明カニスベシ

「同上」

二 着想を紙に落さぬとも瑤鏘の音は胸裡に起る、丹青は畫架に向つて塗抹せんでも

草枕
(夏目金之助)

五彩の絢爛の自ら心眼に映る、只おのが住む世をかく觀じ得て靈臺方寸のカメラに¹⁰澆季溷濁の俗界を清くうらかに收め得れば足る、この故に無聲の詩人は一句なく無色の畫家には尺¹²嫌なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、千金の子よりも萬乘の君よりも幸福である。

一四 (222)

左ノ文章ヲ口語ニテ解釋スベシ

「大正十
一三重高
農」
駿臺雜話
(室鳩巢集)

① 楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなばいかに情なかるべきを、なほその手折りし手を去りやらで、惜み顔に吹くこそいとやさしけれ。古よりの忠臣義士の、盛衰存亡をもて心を變へぬに譬へつべく、源平二家の間に、その士を求むること、亦難からざるなり。

「同上」

② 人誰か禍福の變轉に驚き、命運の變化を歎せざらん。福祉を得て歡び、不運に接して悲むは人の常情のみ。然れども、運命の怒濤に抗し、毅然として自己の位置を維持する事をなさず、徒らに外界の變轉極りなき境遇運命に翻弄せらるる如きは、自ら自己の天職と能力を知らざる者にして、自棄の甚だしき之に過ぎたるはなかる

「大正十
一鳥取高
農」

べし。人類自ら人生の當に勉むべき最高の究極目的と又之に達すべき天賦の性能あるなり。拮据此性能を活動せしめ、自ら立つの氣象なき者は人にあらざるなり。

一五 (223)

解釋

① ふみわけよやまどにあらぬ唐鳥の迹を見るのみ人の道かは。

② 智に働けば角が立つ、情に棹させば流させる。

③ 不¹恥²三³下⁴問⁵。④ 潜²勢¹力³。⑤ インスピレーション、⑥ 柳⁴縁³花²紅¹、
⑦ 雉⁵子⁴も鳴³かずばうたれまい。

一六 (224)

左ノ文ヲ口語ニテ解釋スベシ

「大正十
一鹿兒島
高農」

① 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限リニ於テ信教ノ自由ヲ有ス。

② 池心澄みたり、頻に禽の影を喚ぶ、天心低うしてその間、垂直に涙線の通するあるか、滴々としておもてに涙隕つ、熟視すれば、水馬の點するなり。

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
工」桐生高
徒然草
兼好法
師

一 (甲) くらき人の人をはかりてその智を知れりとおもはん更にあたるべからず拙き人の碁うつことばかりに敏くたくみなるは賢き人のこの藝におろかなるを見ておのれが智に及ばずときだめてよろづの道のたくみわが道を人の知らざるを見ておのれ勝れたりとは思はんこと大なるあやまりなるべし文學の法師暗證の禪師互にはかりておのれに如かずと思へる共にあたらすおのれが境界にあらざるものをば争ふべからず是非すべからず。

(乙) 朝まだき旅立すれば駒の歩に連れて茅屋の軒も動き絲の如くなる炊煙後に颯き清爽の氣身を襲ひ残月彼方の山の端にかかり村里は靄の中に在りて覺めず歩々と暗どが地歩を争ふが如き又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば蝸牛壁に紋を畫きて自ら多年の風雨の侵蝕せるを示したる若くば夕陽に馬を下りて古英雄を弔へば。

夏草やつはものどもが夢のあと

何とも名状すべからざる幽懷を生ずるが如き是皆旅行に非ずんば得べからざるものにあらずや。

「同上」

二 (イ) 緩衝國、 (ロ) 事大思想、 (ハ) 曲學阿世、 (ニ) 名利、 (ホ) 糊口、

一八(226)

左ノ文ヲ解釋セヨ

身儒林より起りて位三位に昇れるもの菅公の前代に於て一吉備氏あるのみ事既に異例に屬す當時藤原氏は外戚の餘威に誇り攝關の門閥に乘じ一族の權勢上下に蔓延せり菅公一寒儒の身を以て是の間に處し俄に天子の信任を得て聲名一時を鼓動す其の蹟尋常ならざるものあり一朝讒奸君明を掩うて邊陲に左遷せらるるや榮辱忽ち處を異にせるも而かも一語の天を怨み人を憎むもの無し其の情亦人に異なるものあり薨じて後官位幾もなく舊に復し遺靈長へに神として祀らる天滿天神の名何ぞ夫れ莊嚴偉大なる其の跡寧ろ神怪なりと謂ふべし。

「米澤高
工」樽牛全集
高山林
次郎

一九(227)

「大正十
一明治專
門」
樂訓
軒(貝原益)

處ノ文ヲ解釋セヨ

一 長月¹の比は、秋の花も過ぎ、紅葉も未だしき折なるに、菊は百花におくれ、ひとり晩節²をたもち、霜にほこりて、操の色をあらはし、なべての花に時をことにするのみならず、色・形・匂ともに、殊にすぐれてあてやかなれば、此の時もし花多くも、わけて憐むべきに、秋の末にひとりさかりなれば、折にあひて、いとめでたし元稹が菊を詠じて「不是花中獨愛菊、此花開盡更無花」といへりしは、菊をめてし心猶うすし。

左ノ語句ニ讀假名ヲ附シ且ツ解釋セヨ

「同上」
二 除目⁸、矢頃⁹、衣鉢¹⁰を傳ふ、先蹤¹¹、奇禍¹²を買ふ、慰藉¹³、巨擘¹⁴、葛籐¹⁵、蓮府槐門¹⁶、唇齒輔車¹⁷、

二〇(228)

左ノ文章ヲ口語ニテ解釋セヨ

「大正十
一大阪外
語」
八犬傳
琴(瀧澤馬)

一 古の人云はずや禍福は糾ふ繩の如し人間萬事往として塞翁が馬ならぬはなしそは福の倚る處將禍の伏する所彼れにあれば是にありとは思へども豫てより誰れかよく

その極を知らん。

「同上」
二 わが身すらわが心に叶はず自らせじと思ひしことをも誤りてすること多し況や人のわざわが思ふ如くなるべきやうなし其の上人心の同じからざること其の面の如し人のわが心に叶はざるを恨むべからず。

二一(229)

左ノ文句ノ内ノ左側ニ細線ヲ加ヘタル部分ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

「大正十
一東京外
語」
平家物語
(不詳)

一 花の散るを見ては三年の春秋¹を辨へ蟬の聲²を送るは夏と思ひ雪の積るを冬と知る白月³黒月⁴替りて行くを見ては三十日を辨へ指を折りて數ふれば今年は六つになると覺ゆる稚き者も早先立ちけるごさんなれ。

左ノ文句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

「同上」
二 心體⁶光明なれば暗室の中に青天あり念頭⁷暗昧なれば白日の下に厲鬼を生ず。

二二(230)

左ノ文章ヲ口語ニテ解釋セヨ

「大正十
一平安」
ここに、鳳闕¹のいしする、空しく残り、椒房²のあらし、夜々かなしむ。保元こ

一 農業者
成所 養業
樗牛全集
感 平家雜
次郎 高山林

の方、天下の榮華をつくしたる、花の都を、燒野の原と顧みて、末は煙の浪雲の浪行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣をつけたれど、詠歌の餘哀に狂れて、弓矢の響を勵まん心ちせず。さても棄て難き命や。今こそは浮世なれ。さすがにしのばるる昔の様の、夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る處に滿てり。嗚呼、きのふは東關の下に、轡をならべて十萬餘騎、けふは西海の波に、纜を解きて七千餘人。行方の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷ましむるもののみなり。

一七〇

第十二課

一 (231)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
二各高
等」

一 口にいうて人の聞かぬやうにし身になして人の知らぬやうにとするはいやしきたどへながら悪に利息を添へて身に負ふが如し日にそひ月にそひて其の負まさりなば

「同上」

い。か。で。お。ほ。ひ。隠。す。べ。き。
二 さしもあるまじききは人の墓にも事⁴事⁵しきいし⁵ふみを建つることも今の世にはいと多かるあまりたぐひおほくてめづらしげ⁶なくなかなか⁶にこころおとりせられてうるさくぞ覺ゆれ。

此ノ問題ハ全文ノ大意ヲ記セヨ

「同上」
玉勝間
長 本居宣

三 嗚呼プリンヂイシイの港を出でてよりはや二十日あまりを経ぬ世の常ならば生面の容にさへ交を結びて旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに微恙⁸にことよせて房の裡にのみ籠りて同行の人々にも物言ふ事の少きは人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり此の恨は初め一抹の雲の如く我が心を掠めて瑞西の山色をも見せず伊太利の古蹟にも心を留めさせず中ごろは世を厭ひ身をはかなみて腸日ごとに九廻すといふべき惨痛をわれに負はせ今は心の奥に凝り固まりて一點の翳とのみなりたれど文讀むごとに物見ること鏡に映る影聲に應ずる響の如く限なき懷舊の情を喚び起して幾度となく我が心を苦しむ嗚呼いかにしてか斯の恨を鎖せむ。

二 (232)

一七一

「大正十
二陸士」

左ノ文ヲ解釋セヨ

一 天が下に二人の君おはしまして何れもさりぬべき御傳にておろかに思ひ奉るべうもあらず年の名さへかなたこなたひとしからぬにぞ。國々の民共はいづ方にかはなどたゆたひつつ芳野殿に參るあれば引きたがへて京に隨ふもありしかばつひには戰の媒にて四方の國々は亂れ果てぬ。

「同上」

二 英雄も汝が彼はかくあるべしと信ずる如くに完全ならず敵も汝がかくあるべしと想ふ如くに悪しからず一年の數日富士山は畫家の好んで描くが如き美觀を以て其の榮光を現するのみされどまた其の山容の全く隠れて現はれざるが如き暗黒荒涼なる日は尙ほ少なし。

三 (233)

左ノ文ヲ解釋セヨ

一 人の世にある習、驕慢を先としてよく穩便なるは少し。或は自由の方にておだやかならず。これは、我が涯分をはからず、さしもなき身を高く思ひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。或は偏執の方にて頑なり。これは、我が思ひたる事

「大正十
二海軍各
十訓抄
(不詳)」

をいみじうして人のいふ事を用ひざるなり。

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

「同上」

二 藤原俊成の詠するところ、艶麗にして幽婉、しかも力めて高雅の趣を脱せざらんことを期す。渾然たる美玉、毫も斧鑿の痕なきが如しといへども、これなほ琢磨の果なり。天受の才は才なりといへども、放縱の才にあらずして折衷の才なり。學を積み。想を練り、苦心慘澹として遂に一家を成す。かれの歌は村舎の白梅東風に野香を恣にするものにあらずして、瓶裏の紅梅枝を矯めて形を正せるものなり。

「同上」

三 我が國文化状態の一大缺陷は主として西洋文明の歴史的考察が未だ學界に洽く普及せざるに由らずんばあらず。而もこの考察は實に容易の業にあらず、必ずや識見の非凡と典籍の涉獵とに加ふるに、彼の國土の文物に親炙し、彼の人民の思想、風俗を體驗し、若くは少くともこれに接觸して、始めて博大且深刻となり、眞に事象の正鵠に中り得べきのみ。

四 (234)

「大正十
二東京高
師」

解 釋

凡そ躬の行にてもあれ人の事にあづかる事にてもあれ政にてもあれ新なりといふ文字を忘る可らず日に新なりといふはものは事々に新に物々に新なるべし昨日の事に馴れて思ひあやまるもかねて知れる事と思ひて敗とるも多しかの賢き人の愚なる人に欺かるるもひとつびとつに新ならねばこそありけれ昨日憎しと思ひし事心にそみ去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば其れよりねざして迷ふとか聞けりげに日新の教はよろづにかよはして身を終ふるまで忘るな。

五 (235)

次ノ語句ヲ解釋セヨ

「大正十
二廣島高
師」

- 一 (イ) 訓話、 (ロ) 飄逸、 (ハ) 自我の實現、 (ニ) 超自然力、 (ホ) 民謡、

左ノ漢字ニ假名ヲ附ケ且ツ全文ヲ解釋セヨ

「大正十
二各醫
專」

二 明治の革新には壽永の昔の如き偉人の健闘して人目を眩せしむるものなし是れ權力授受の樽俎折衝の間に穩かに局を結びたるにも由るべしといへども今や氣運は移りて英雄の時代は過ぎ民衆の時代は來れるなり非凡の手腕ある個人を中心として其

の歎美者と憎悪者とが集れるはもはや歴史の夢にして文化の弘通と新なる社會組織とは一個人をして高く群衆に擢んでしむることを許さず上下貴賤共同して働くは現代の事實なり。

六 (236)

次ノ全文ノ解釋ヲ記セヨ

「大正十
二神戸高
商」
年々隨筆
(石原正
明)

一 夕べやまさりたらむ。村雨なごりなくはれ、風いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならず處々にかかれるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむ、匂ひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峰の松原こき緑なるにあかねの色もゆるやうにて、日のなからばかりさし出でたる。

文ノ文章中傍線ヲ施シタル箇所ノ解釋ヲ記セヨ

「同上」

二 人、天然と親む時に於ては、面上三斗の塵、忽焉として消失するなり。胸中一片の靈火、勃然として燃え來るなり。若夫れ愈遂く愈親み「道通天地有形外、思入雲變態中」に至つては、是れ實に天然と同化したるなり。然れども天然と親むは未だ幽寂の極にあらず。寧ろ如かむや、一室の裡、又玄、又默、意象極めて分明なる

に、是時に於て意志收縮、凝りて氷の如し、水晶の如し、爛星の如し、敬虔¹³、警發¹⁴、身は上帝の聖壇に近づきたるを覺ゆるのみ。

七 (237)

次ノ文章ヲ解釋セヨ

一 残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければと詠みしもことわりなり櫻の盛はただ二日三日ばかりあまりあへなき心地はすれど又來ん春はと心いられて待たるも久しからぬ故ぞかし唐桐といふもの葉のさま涼しげに花の色いどめでたけれど夏のなかばより秋過ぐるまでただ同じさまに咲きたるに飽きはててとく枯れよかしとさへぞ思はるるや。

次ノ言葉ノ意義ヲシルスベシ

二 (い) いみじ、(ろ) 入相、(は) 境遇の縁、(に) 迦陵頻伽、(ほ) よすが、(へ) 素絹、(と) 打物師、(ち) 常住、(り) 引出物、(ぬ) 直垂

八 (238)

「大正十
二名古屋
商」

左ノ文ノ大意ヲ最簡單ニ述ベ且ツ傍線ヲ附セル字句ノ讀方及ビ解釋ヲナスベシ

川柳氏曰く「賣家と漢様で書く三代目」と、是れ初代勤儉にして家を興し、二代之を繼紹し、三代に到りて氣隨、放埒となり、徒らに淫樂を事とし、遊藝に耽りて、家を滅すも、尙ほ之を悟らざるの心意氣を諷したるもの也。然も三代目とて、必ずしも家を滅さねばならぬ約束なし、徳川氏の如きは、三代將軍家光に到りて、父祖の業を大成したり。足利氏に於ても、尊氏、義詮を經、義滿に到りて、略々統一の業を遂げたり。乃ち個人の家に就いて、之を觀察するも、必ずしも川柳氏の言の如くならず、却つて其の反對に出づるものなからず、然も但だ漫に父祖の餘澤に浴するの兒孫、動もすれば先代艱難の事業を閑却し其の由來する徑路を忘却し、獨り自から恣なるものあるを免れず。是れ所謂る金持若旦那の通弊なり。而して誰か我大正の青年に向つて、此の通弊なしと斷言し得るものぞ。

九 (239)

解釋スベシ

あけくれ心へだてぬ友どちは、かからぬをりだに、何事につけても、まづ思ひ出で

「大正十
二長崎高

商「鈴屋集
本居宣
長」

侍らるるわざなるを、まして、かくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見侍らむことのいとあたらしく思ひ侍れば、よし跡つけても人の訪ひ給はしかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものと思ひ侍るに、いかにどだに音づれもし給はぬは、いと思はずに、うらめしくなむ。

一〇(240)

解釋

心ここにあらざれば、見れども見えず、目のまへにみち／＼て、楽しむべきありさまあるをも知らず、春秋にあひても感せず、月花を見ても情なく、聖賢の書にむかひてもこのまず、只、私慾にふけりて、身をくるしめ、不仁にして人をくるしめ、さがなくいやしきわざのみ行ひて、わづかなる命の内を、はかなく月日をおくること、をしむべし。

一一(241)

左ノ文章ヲワカリ易ク口語ヲ譯セ

「大正十
二和歌山
高商」

一 戸毎に富み、家ごとに足るなどいふは、いかなることにかあらむといふに、風俗質朴にして、上下の制あるをいふ。おの／＼その分を守らず、おごりにながれもてゆかば、租税みな民に與ふとも、富みたることはあらじかし。

左ノ語句ヲ解釋セヨ

「同上」

二 油斷大敵、損して得取れ、いそがばまはれ、敵國破れて謀臣亡ぶ、富みたる者の天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも難し。

一二(242)

全文ヲ解釋スベシ

「大正十
二福島高
商」
花月草紙
松平定
信

一 家國の姿は若々とあらまほしもし年老いたる姿になりもて行かば物事沈みはてて人に見知られじと物の色目も花やかならざれと思ふまでになり行くぞかしその心よりして人に秀でんの心もとよりなければ物の堪能上手もたえはてぬるものとなん。

左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

二 ただにいひてはことゆきがたきこころも萬の物のうへにたとへていへばこともなくよく聞ゆること多くあるわざなり。

「大正十
二大阪外
語」

「同上」

三 暇ある人さびしさのあまりに暇なく時を惜しむ人の許に來り心のどけくよしなき長ものがたりしあるじにいとほるこそむげに心なきわざなれ。

一八〇

一三 (243)

左ノ文句ノ内ノ左側ニ細線ヲ加ヘタル部分ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

積善の餘慶家に盡き積悪の餘殃身に及ぶが故に帝都を出でて旅泊に漂ふ上は何の頼かあるべきなれども一樹の陰に宿るも前世の契淺からず同じ流を掬ぶも他生の縁尙深し況や汝等は一旦從ひつく門客にあらず累祖相傳の家人なり或は近親の好他に異なるもあり或は重代芳恩これ深きもあり家門繁昌の古はその恩波に依つて私を顧みき何ぞ今その芳恩を報いざらんや。

左ノ文句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

書を讀みて聖賢を見ざれば鉛槧の備となり官に居て子民を愛せざれば衣冠の盜となる。

一四 (244)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
二北海道
帝大農」

一 ひどりよし野の奥にたどりけるにまことに山深く白雲峰にかかり烟雨谷を埋んで山賤の家處々にちひさく西に木を伐る音東に響き院々の鐘の聲は心の底にこたふ。
二 予竊に思へらく「宇宙は矛盾の巢窟なり」と不秩序なるが如くなれどその中に秩序あり無常なれどその底に常住の大道存す或はこれら無數なる矛盾の深意を會しその間に處して宜しきを得たらんものこれを眞の人間と稱すべきか。

一五 (245)

次ノ文章ヲ詳細ニ説明スベシ殊ニ誰ガ誰ニトカ誰ヲトカ誰ノトカ一々其ノ人ヲ指シテ説明スベシ

文治それの年の秋八月十五日鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ廣前を罷りて御手輿に召させ給ふほど御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき旅に飢えていと瘦せ黒みづきたるに衣杖笠なども乞食者のさましたる鋭き御眼尻にどどめさせ給ひ直人ならずとや覺しけん「あの法師が修業するやう名をも問へ」と仰せ給ふ御輿添の若侍急ぎ走り寄りて「ありがたく御目賜へり何處よりの修行ぞ名をも申せ」といふゆくりなきに驚きたる様して「雲水に在處定めず侍るものにて名は圓位と申す」といふ聞しめされて「さればこそ聞き知りたれ穴熊の猛き獲物の

一八一

「大正十
二水産講
習」
藤篋冊子
成上田秋

「大正十
二仙臺高
工」

「大正十
二東京外
語」
平家物語
(不詳)

類ならで賢き人得たるためしに誘ひかへらんわが後につきて參れといへ」とて召し
連れさせたまへり。

一六 (246)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
二米澤高
工」

一 (イ) 邦人の外國崇拜は往古より之れあり必ずしも今日に始まれるに非ず殆んど傳統
的因襲と云ふべし。曾て範²を支那に取り宛然其屬國の如き思想を抱き言論をなせるも
のありき今人之を笑はんも而も現に英米に對して如上の態度に出でざるもの幾何ぞ
(ロ) 國家に禍するは口に愛國を説かざる者ならず頻りに之を説き行の之に反する者
なり歴史上に忠義振りて最も不忠なる者の例を絶たず古來大奸は忠に似たりと云へ
り富貴を私する勢利者流は外を忠愛にし内を非忠愛にす。

左ノ語句ニ讀假名ヲ附シ且シ解釋セヨ

「同上」

- 二 操觚者、⁶ 付度、⁷ 曠日彌久、⁸ 玉緒、⁹ 斷末魔、¹⁰ 常闇、¹¹ 莫逆、¹²
- ¹³ 長袖者流、¹⁴ 布衣、¹⁵ 暖簾、¹⁶ 繻子、¹⁷ 餉臺、¹⁸ 喫驚、¹⁹ 骨牌、²⁰ 瞞着、
- ²¹ 挪揄、²² 換氣、²³ 賢所、

一七 (247)

左ノ文章ヲ平易ナル口語文ニテ解釋セヨ

「大正十
二桐生高
工」
方丈記
(鴨長明)

一 それ三界はただ心一つなり心若し安からずば牛馬七珍もよしなく宮殿樓閣も望な
し今淋しき住まひ一間の庵自ら之を愛すおのづから都に出でては乞食となれること
を恥づと雖もかへりてここに居る時は他の俗塵に著することを憐ぶ若し人この言へ
ることを疑はば魚鳥の有様を見よ魚は水に飽かず魚にあらざれば其の心を知らず鳥
は林を願ふ鳥にあらざればその心を知らず閑居の氣味もまた此の如し住ますして誰
かさとらん。

左ノ語句ヲ解釋セヨ

「同上」

- 二 (イ) 宸襟、⁷ (ロ) 社會奉仕、⁸ (ハ) 生業、⁹ (ニ) 陶冶、¹⁰ (ホ) 揣摩臆測、¹¹

一八 (248)

解釋

一 眞理に適ひ、正義に準ずる道を踏んで、歩一步世界に出ようとする日本の若い希
望は、今や將に灼熱の域に入らうとして居る。鐵は灼熱の時に於て之を打ち之を鍛

へなければ、忽ちに熱を失つて、終に永く之を擴充する機會を失ふ。凡そ國家の大に興隆する時機は、歴史の教へる所に從へば、概して一世紀半世紀の間である。此の間に大に延び大に擴がり、精神的にも物質的にも發展を策せねば、其の國家は永く偉大な功績と自己の影とを歴史の上に投げ、人類文化の上に貢獻することが出来ない。

「同上」
徒然草
兼好法師

二 人の田を論ずるもの、訟にまけてねたさに、その田を刈りてどれとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを「これは論じたまふ所にあらず、いかにかくはといひければ、刈るものども「その所とても刈るべき理なければ、僻事せんとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらん」とぞいひける。ことわり、いとをかしかりけり。

一九(249)

解釋

「大正十
二廣島高
工」

一 普通の方面より研究する者は動もすれば無差別的見解を立て其の實他を標準として我を律するの弊に陥ること少からず又特殊を主とする者は頑冥固陋にして自ら誤

るのみか他に對して甚しき偏見を抱くことあり自他の歴史の對照に依て國の特性を研究せんとする場合普通と特殊の關係を公明に取扱ふことは甚だ困難なれども頗る重要な問題なり。

讀方解釋

「大正十
二小樽高
商」

二 (イ) 撥亂反正、(ロ) 五風十雨、(ハ) 形影相弔ふ、(ニ) 簞食壺漿、(ホ) 苛歛、誅求、(ヘ) ふみ月中の五日、(ト) ひつぎのみこのあれましし時、(チ) おんいたづきおこたらせ給はず、(リ) 賢所、(ヌ) 世にも稀なる善智識

二〇(250)

讀方及解釋

「大正十
二名古屋
高工」

一 (イ) 軒輊、(ロ) 刹那、(ハ) 濫觴、(ニ) 德憑、(ホ) 折衝、(ヘ) 敷衍、(ト) 胚胎、(チ) 扞格、(リ) 揣摩、(ヌ) 耽溺

完全ナル一文ノ意味ヲナスヤウ左ノ各句ノ()中ニ數字ニテ順序ヲ附セ

- () 時トシテハ忘恩背德ノ相トシテ現ハレル、
- () 吾人ノ生命ノ形相ハ、

- () 時トシテハ知恩報德ノ相トシテ現ハレ、
- () 相反シ相容レサルニ面ヲ現ハス吾人ノ本性ハ、
- () ソモ如何ナル者デアラウカ。
- () 斯ノ如ク境遇ノ流轉ニ應ジテ、
- () 或ハ又本來悪ナリト述べ、
- () 古人ハ此ノ疑問ニ對シテ、
- () 更ニ又善惡無記ナリトモ論ジテ居ル。
- () 或ハ本來善ナリトイヒ、

第十三課

一 (251)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
三各高
等」

一 ゆほどくはてなきに雨もいみじうふりまさり日さへ暮れはていとくらきにしらぬ山路をわたりなくたどりつつ行くほどかからでもありぬべきものをなにに來つらんとまでいとわびし。

「同上」

二 内部に待つものなければ。外力の來るに應せず。東風春雨は草木發生の因となれども種子下に含むなくんば。如何疾疫の氣勢を逞しくするも健全にして内に惱む所なき身體を犯すこと能はず。

左ノ文章中右側ニ傍線ヲ施シタル部分ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「同上」

三 足らざることを知るは滿つるに到るの路なり。至らざるを悟るは上に向ふの途なり。吾が趣味の猶足らざるを知り猶至らざるを悟る者は幸なりその人の趣味將に漸く進み漸く長せんとす吾が趣味の幼きをも省みて我が善しとするものを必ず善しとし我がをかしとするものをいつもをかしとして高きに遷り卑しきを改むることをせぬ者無しその人の心の花既に石となりて生命を失ひ居ればなり。慾望は我を桎梏す自在なし。趣味は我を繫縛せず自由ありその物を得ざれば苦しみその願を遂げざれば悩み吾が心を外の物の奴婢としてその使役するところとなるは慾望の然らしむるなり。慾望は人を窮め趣味は人を活かす趣味饒なる人は辛なるかな。

二 (252)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十
二陸士」

一 葉月の比、都に上らんとて立ち出で侍るに、石山寺なん。久しう詣でざりつれば、此のついでにとて立ちより侍る。山のもみちはまだしき程なれど、所がらなる秋の景色はいひしらす物あはれにて、岩のすがた水の流なんど、うき世を離れて、いみじう清げなり。はるく見やらるる湖のおもては、うち出づる浪の花にも秋ありて遠き望もまたたぐひなくなん。

左ノ文ノ大意ヲ極メテ簡單ニ記セ

「同上」 二 學ぶ所を行ひて以て宜しきを得れば、學始めて其の完全を稱すべく、行ふ所、學に従つて戻らざれば、行ひ始めて其の適切を誇るべし。知行合一は畢竟學者の標的たり。天下の學者何を限らんや。而も其の行に於て茫々として見る所少なきは何ぞ所謂學者の信する所堅からざればなり。知る所以て行ふ、一見甚だ尋常容易の事なるが如し。然れども是れ學者としての最大難事なり。行爲は常に責任と伴ふ。一個人として社會國家に其の人格の地步を占得し、其の生存の意義を明らかにする所以なればなり。其の所信を公白し、嶄々然として依りて其の一念を貫徹す。是れ事に處して首鼠兩端を持する者の爲し能はざる所なり。機に臨みて狐疑猶豫する者の爲

「同上」

し能はざる所なり。抑も又其の然る所以の理に徹底し、中心より其の眞と義とを會得したる者に非ざれば爲し能はざる所なり。苟もこれを爲すには、一世批議の衝に當り、毅然として自ら立つの覺悟あらんを要す。さもあらばあれ、眞正の學者は事遂に是に出でざるべからず。

三 (イ) 目あき千人目くら千人、 (ロ) 打算的、 (ハ) 沒交渉、 (ニ) 門外漢、 (ホ) 環境、

三 (253)

次ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
二各海
軍」

一 かりそめに交りては、よきやうなる人も、隔なく睦びかはしては、おもひの外にあしきあり。にくきおもやうにて、言ひいづることはくしくなつかしげなき人の、其の事、彼のこと聞えあはするに、なさけ深たのもしきもあなり。さればよく心をどどめ、よしあしを見しりて、打解けもし、へだてもすべき事なりかし。

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ (二) モ同シ

「同上」 二 この一篇を讀み了るや、涙滂沱として吾面を沾し、われは卷を掩ひて暫く仰ぎ見ること能はざりき。初めわれ青松を追ひて水涯にさまよひ、白雲に伴はれて山巔に